

見田方遺跡発掘調査報告書

1971

越谷市教育委員会

見田方遺跡発掘調査報告書

1971

越谷市教育委員会

序

宅地造成の特に急激な当市においての文化財保護は、なかなかの努力を要するものであります。市民の皆さんのご協力を得てはじめて可能なものです。

この一環として大相模地区（旧大相模村）見田方遺跡の発掘を昭和41年12月及び昭和42年3月の2回に亘って行ない大きな成果を挙げました。

従来大相模村には古墳があるなどと記されていますが裏付けになる何等の資料、記録及び遺跡もありません。埼玉県東部低湿地帯に在る当市の歴史は現在までの資料によって鎌倉時代以降からと推測されていましたが、この発掘によって今より約1300年前古墳時代後期に集落が形成されていましたことが立証されました。これらの整理と考証を終了し、発掘後数年になりますが、ここに報告書を発行するに至りましたことは誠に喜びに堪えません。発掘の際地元の皆さんのが絶大なご協力を得ましたことを深く感謝いたします。と同時に今後も市民の皆さんのが文化財の保護にご協力下さることをお願い申し上げます。

末筆ながらこの発掘の中心となられた和島岡山大教授、三友崎大教授、中村資源科学研究所嘱託、川越小泉教諭、不動岡高井教諭、越谷市立東中高崎教諭、其他市内高校、中学教諭並に生徒諸君に衷心より御礼申し上げます。

昭和46年3月30日

越谷市長 烏村平市郎

発刊にあたって

さきに「越谷市の史蹟と伝説」を刊行し、多人の成果をあげましたが、その際、越谷市の歴史はいつ頃までさかのぼることができるかが論議の的でした。

今回の見田方遺跡の発見と発掘調査は市史の上限を解明する一つの手がかりとなりえたことは誠にご同感にたえません。千数百年前の越谷の土地は殆んどが低湿地であったと思われます。そのような自然環境の中にあって、地盤の固い微高地に集落をつくり、漁や水稻を栽培し、衣服を織り、各種の土器を使うといった基本的生活様式は今日に通じるものがあります。しかれども利根川、荒川等の乱流する低地であるため洪水にみまわれることもしばしばであって、その都度再起するといった先人の開拓精神には今日でも学ぶものがあると思います。

市内には国、県、市指定の文化財が16件あります。これらの保護は申すにおよばず、未指定文化財も開発等による損傷、破壊の危険も増大しますので、今後の文化財保護行政を強力におしえすめたいと存じます。

「見田方遺跡発掘調査報告書」の刊行にあたり、大塚洋鹿前市長、秋山長作前教育長を始め、各大学、高校の関係各位に深く感謝申し上げます。

1971年3月30日

越谷市教育委員会教育長

藤倉 薫

発刊を祝して

—歴史への郷愁

最近、ひまにあかせて、ベルンハイムの「歴史とは何ぞや」（岩波文庫初版本・坂口訳）を久しぶりに書架から取りだして拾い読みをした。その中に

伝説的特徴のある物語に就いては、他の諸史料によって確証されるものだけを事実として採用する。……云々。

とあるのを見て、ふっと思いついたことがある。

私は少年の頃から、越ヶ谷でいちばん古い由緒のある旧跡は、木町三丁目の“市神様”と、私の生れた新石二丁目の“八幡様”だと聞かされてきたが、その証拠がないを残念に思った。しかし、その後さらに今の御殿町にレッキとした鎌倉時代の板碑が残存しているのを知って、この伝説の眞実性を物語る傍證だと考えるようになった。だがそれにしても私は、越谷の史実の上限はせいぜい鎌倉時代を余りさかのぼるものではないと信じていたのである。

ところが、大相模地区の土地改良工事の進む過程で、見田方から越谷先人の住居址が発見されかづかづの出土品がでてくることになって、私の既成概念が独断であったことをつくづく感じさせられたのである。

なかでも私の注目をひいたのは、その住居址からモミガラが出てきたことである。今から千数百年も前に水稻栽培をやっていたという事実に接し、思いのほか早くから私どもの祖先が、エンゲルスのいわゆる文明生活の段階に達していたことを身近かに確かめることができたからである。

市の教育委員会も、それ以後といふものは、この遺跡の貴重なことを重視して発掘に少なからぬ費用を投じてきた。追ってこれらを保存するために見田方遺跡公園の構想も日程にのぼっているということである。

このたびこのことを記念して発掘の調査報告書が公けにされることになったのは、越谷人にとっておおいに満足なことであり、また関東地方の低湿地帯の史実の解明に役立つことも必定であろう。あらためて高崎先生はじめ関係者のご苦労に対して深く敬意を表すると共に、次のような“史学の価値と効用”を説いたベルンハイムのことばを抄録して、本書の発刊を祝したい。

我々人間に自己知識と自己認識とを教え、過去の事件や状態が、いかにしてまた何によつて生成したか、実に何が未来に於て其らのものから生成するであろうかを示し、以て過去の事件や状態から現在の其らを理解させる。

1971.3.27

柳田書屋にて

前越谷市長 大塚伴鹿

見田方遺跡発掘調査委員会

顧問 大塚伴鹿（越谷市長）
委員長 秋山長作（越谷市教育長）
副委員長 大野伊右衛門（越谷市文化財調査委員長）
委員 矢島茂重（教育次長）会計担当
木村信次（越谷市立図書館長）涉外担当
新井英彦（越谷市文化財調査委員）
金井忠夫（不動岡高校教諭）マネージャー
高崎 力（越谷市立東中学校教諭）マネージャー

発掘指導者

三友国五郎 埼玉大学教授 小泉 功 川越高校教諭
和島誠一 関山大学教授 中村嘉男 資源研嘱託

発掘調査協力委員

地元市議会議員 婦人会長
土地整理組合長 大相模小学校長
自治会長 東中学校長

発掘調査団

和島誠一（関山大学教授） 中村嘉男（資源科学研究所嘱託）
三友国五郎（埼玉大学教授） 高崎 力（越谷市立東中学校教諭）
小泉 功（川越高校教諭） 金井忠夫（不動岡高校教諭）
坂本 彰（国学院大学学生） 若山民雄（立教大学学生）
荻島加津子（明治大学学生） 松尾鉄城（立正大学学生）
松永佳美（東洋大学学生） 山口隆大（和光大学学生）
堀井礎夫（ 々 ） 洪谷義之（立正大学生）
本堂寿一（ 々 ） 秋山泰雄（東京薬科大学生）
鈴木正彦（ 々 ） 小久保勉（明治大学生）
佐藤和雄（立教大学学生）
越田賢一郎（ 々 ）

目 次

序

発刊にあたって

発刊を祝して 一歴史への郷愁一

見田方遺跡発掘調査委員会

I 自然環境

1 位 置 1

2 地 形 2

3 地質と遺物 3

4 越谷市近辺の遺跡 7

II 発掘にいたるまでの経過 7

III 発掘経過

1 第1次発掘調査 9

整理調査 10

2 第2次発掘調査 10

IV 住居址と遺構

1 1号住居址 14

2 2号住居址 16

3 1号遺構 17

4 2号遺構	18
5 3号遺構	21
6 4号遺構、5号遺構	21
7 その他の遺構	25

V 遺 物

1 土 器	27
表面採集および既掘の土器	53
2 出土土器に関する若干の問題	54
3 祭具・漁具・石器	56
4 木製品	63
5 流木群	65
6 樹 種	65
7 一本杉の塚	65
Ⅳ ま と め	66

挿 図 目 次

	ページ
第1図 越谷市大相模地区	1
第2図 見田方遺跡地形図	2
第3図 越谷付近の地質図	3
第4図 見田方遺跡付近ボーリング地点	4
第5図 見田方遺跡付近のボーリング柱状図（北側）	4
第6図 ボーリング柱状図（南側）	5
第7図 ボーリング柱状図（南北）	6
第8図 越谷付近の遺跡分布図	7
第9図 見田方遺跡全体図	8
第10図 1号住居址実測図	15
第11図 2号住居址実測図	16
第12図 1号遺構実測図	17
第13図 2号遺構実測図	18
第14図 2号遺構内土器出土状態A	19
第15図 2号遺構内土器出土状態B	20
第16図 12□G土器出土状態図	22
第17図 12・13□G遺構図	23
第18図 12イG、12□G、13イG南壁断面図	24
第19図 8イG、9イG遺構図	25
第20図 8□G遺構図	折込
第21図 8・9・10□G遺構図	折込
第22図 9□G遺構実測図	26
第23図 1イG出土土器図	28
第24図 2イG、2□G出土土器図	29
第25図 5イ・5□G出土土器図	30
第26図 6イG出土土器の1図	31
第27図 6イG出土土器の2図	32
第28図 6□G出土土器図	33
第29図 8△G、9イG出土土器図	34
第30図 9□G出土土器の1図	34
第31図 9□G出土土器の2図	35
第32図 9△・△G出土土器図	36
第33図 10イG出土土器図	37

第34図	10□G出土土器図	39
第35図	10△G出土土器図	40
第36図	10△G出土土器図	41
第37図	11イG出土土器の1図	42
第38図	11イG出土土器の2図	43
第39図	11イG出土土器の3図	44
第40図	12イ・12□G出土土器の1図	45
第41図	12イ・12△G出土土器の2図	46
第42図	12イ・出土土器の3図	47
第43図	12△G・13イG出土土器の1図	49
第44図	12△G・13イG出土土器の2図	50
第45図	13イG出土土器の3図	51
第46図	表面採集及び既掘の土器の1図	52
第47図	表面採集及び既掘の土器の2図	54
第48図	土鍤・漁網用おもり、祭具及び石器図	59
第49図	木製品No.1図	63
第50図	木製品No.2図	64

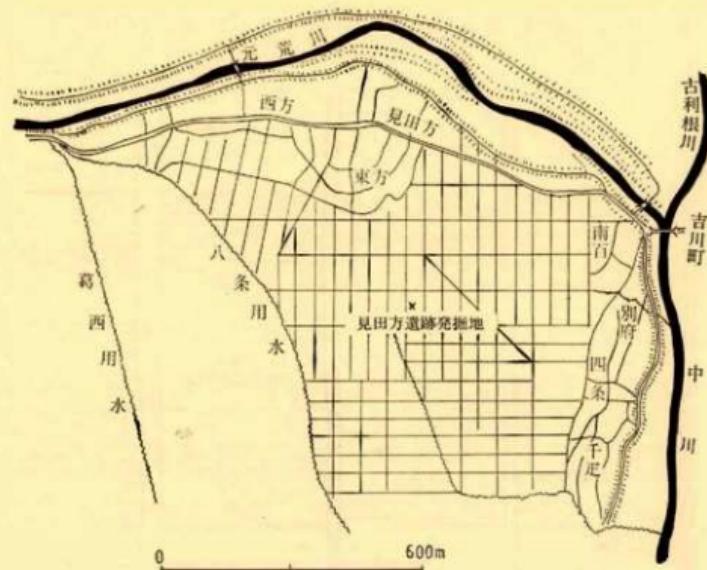
圖 版 目 次

- 圖版1 第1次、第2次發掘狀況
- 圖版2 1号住居址
- 圖版3 土器出土狀況
- 圖版4 2号住居址
- 圖版5 2号住居址
- 圖版6 2号住居址
- 圖版7 2号住居址、3号遺構
- 圖版8 4号遺構
- 圖版9 5号遺構
- 圖版10 土器
- 圖版11 土器
- 圖版12 土器、須恵器
- 圖版13 渔具、祭具、劫錘車、木器
- 圖版14 樹種顯微鏡写真
- 圖版15 樹種顯微鏡写真

I 自然環境

1 位置(第1図)

越谷市は埼玉県の東南部にあり、西は大宮、岩槻の台地、東は千葉県側の下総台地にはさまれた冲積低地である。西の境界に綾瀬川、東の境界に古利根川、そして中央部に元荒川の諸川がそれぞれ東南流している。市域は東西8.6km、南北11.5kmで見田方遺跡は市の東南部にあたる大相模地区



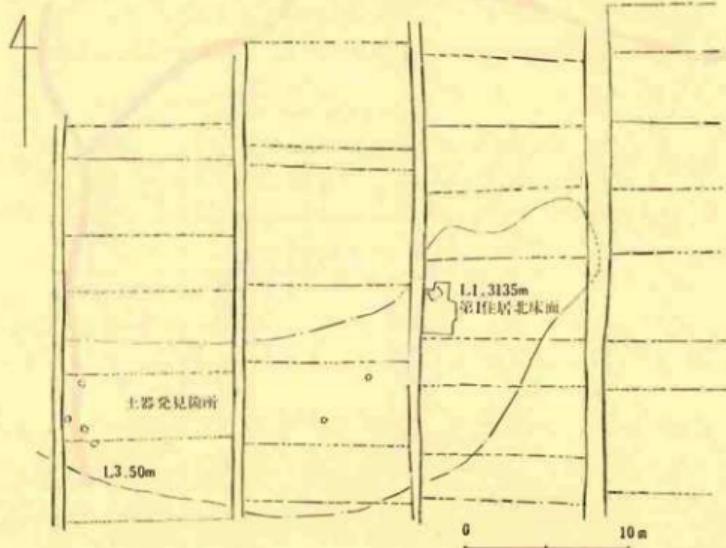
第1図 越谷市大相模地区

のほぼ中央にある。大相模地区は北に元荒川、東に中川（上流は吉利根川）、南にやや離れて綾瀬川があり、集落はこれらの河川により形成された自然堤防上にある。見田方遺跡名は、その位置が大字見田方地区にあることから名づけたものである。

2 地形（第2図）

越谷市は、その全域が沖積低地であって、南にやや傾斜した平坦地である。従って、越谷の生成ないしそ後の発展においても河川を無視することはできない。近世以降の河川の変動を簡単に眺めてみる次のような。

利根古道であった古利根川について考えれば、利根川中流の会ノ川の川筋が廃川となったのは文禄3年（1594）であり、また浅間川より下流の利根川が古川となったのは元和7年（1621）であることから古利根川は元和7年以降全く廃川となつたものである。しかし当時はなお荒川の水を合流していたのであるから吉川町下流の旧利根川流路は荒川の河道に変わつたわけである。然るにその後の寛永6年（1629）荒川は熊谷市付近にて入間川の流路にはいったのでこの古利根川に注ぐ支川としては綾瀬川等の平地河川の一つに過ぎなくなり、埼玉東部低地の悪水路に変化したものである。



第2図 見田方道路地形図

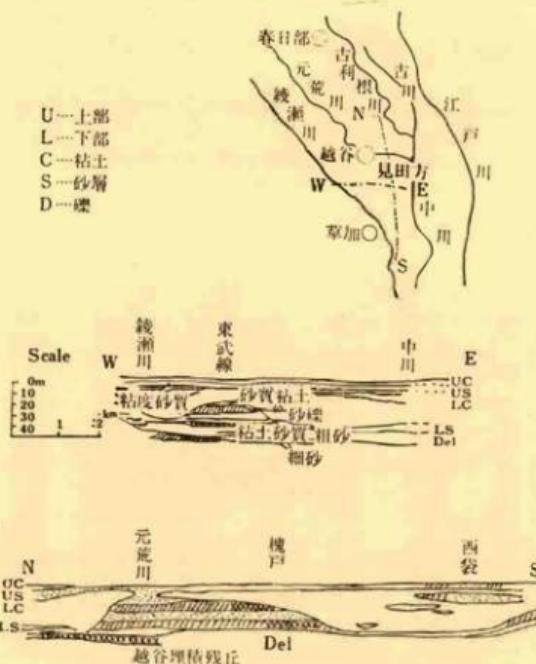
その後、古利根川を用水悪水兼用のものとする計画が進められ、万治3年（1660）に葛西用水を設けることになった。吉川町以下の中川は以前から細流が通じていたらしいが、享保14年（1729）に開さくした新川である。

現在の集落は古利根川、元荒川、綾瀬川の三河川及びそれらの旧河道により形成された自然堤防

上に帯状につらなっている。これを断面的にみると、自然堤防上に集落、その地先が畠地、さらにその先が水田となり、水田地帯の中央部は池沼になっていた例が多い。見田方遺跡はこの後背湿地と思われる中央部に位置しているが、ここだけは同じ水田地帯の中にあっても比較的高く、耕地整理後においても灌水がじゅうぶんなく土抜きをしている。これらの事実から推定すれば、見田方遺跡は古い河川によって形成された自然堤防上に位置するのではないかと考えられる。

3 越谷の土壤と自然遺物（第3、4、5、6、7図）

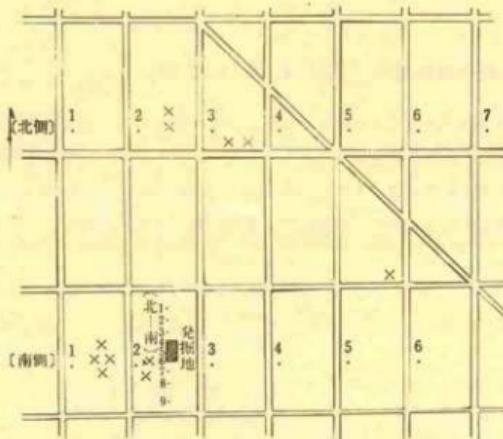
越谷市の地質は第3図によって知ることができる。この図によって沖積低地の生成過程、海進、海退、利根川、荒川による河成層等が読みとることができよう。これら地層の遺物としては、元荒川瓦曾根水門下流約100mの川底下1m (+2.34m) 発掘されたマガキがある。これは「奥東京湾」時代の化石と推定される。外に大沢地区で、葛西用水（逆川）が元荒川の下をくぐる伏鉢工事



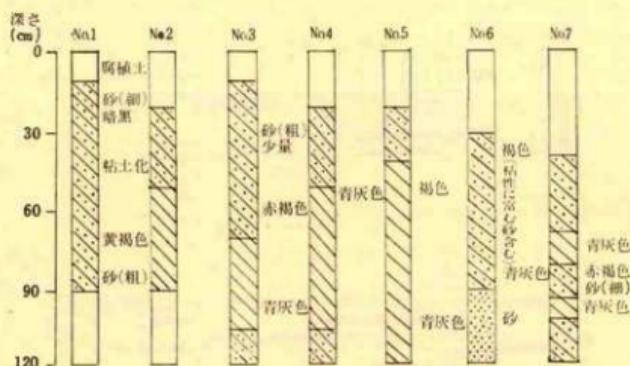
第3図 越谷付近の地質（埼玉県企画部の資料より）

の際地表下約13m (-10m) より発見されたアカガイ等10種類の貝と、その底部から発見された洪積層泥岩貝化石がある。これは明らかに第3回下段に見られる「越谷埋積残丘」上であって、越谷市における最古の化石となっている。

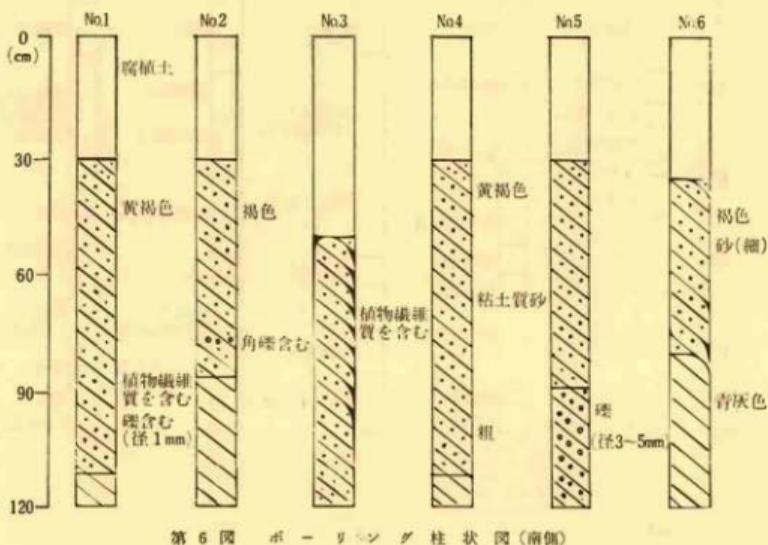
数字はボーリング地点×は土器出土地点



第4図 見田方道路付近ボーリング地点

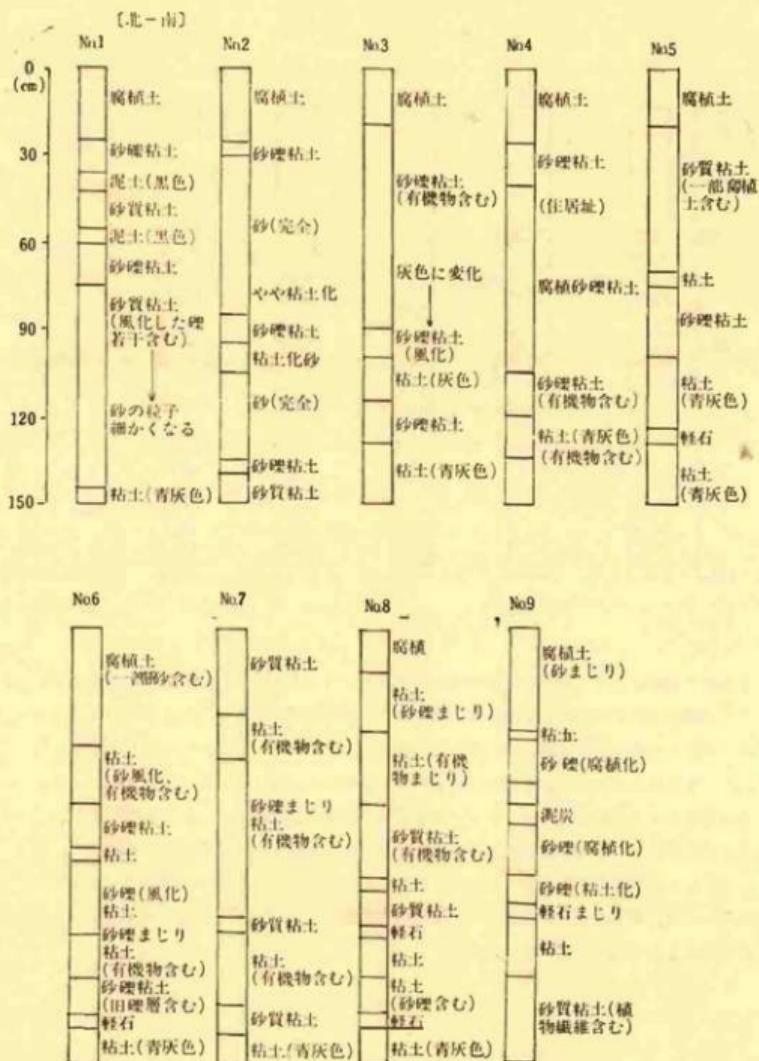


第5図 見田方道路付近のボーリング柱状図(北側)



第6図 ポーリング柱状図(南側)

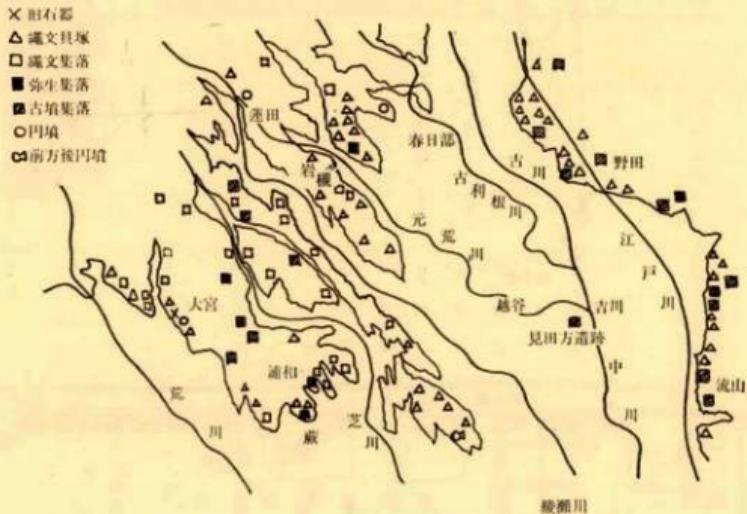
見田方遺跡付近での最初の土器発見は昭和35年2月である。当時は住居址の存在は確認されないで、翌36年にいたり排水溝を約1mの深さに掘った時確認したものである。その時の資料によれば、住居址埋没の深さは25、28、37、30、50cmであって、その基層はいづれも砂質粘土であった。住居址を離れたところは、有機物の含有が多く見られた。第4図、第5図、第6図、第7図は発掘後の43年夏および44年秋のボーリング調査結果の土壤分析である。これから推定すれば、住居址の多くは砂質粘土、砂疊粘土にあり、比較的堅固な地盤がしっかりした自然堤防上に存在していることが解った。以上の資料等から考えられることは、古い河川等による土砂の堆積によって形成された比較的高い(自然堤防など)、地盤の堅固なところに聚落ができたものと推定できよう。この古い河川等の確認は今後の調査研究によつてかね。



第7図 ボーリング柱状図(南北)

4 越谷市近辺の遺跡（第8図）

位置の項で述べたように見田方遺跡のある越谷市は、大宮、岩槻の台地と下総台地の間に位置する低地であって、近辺の遺跡の殆んどはこれらの台地上にある。（第8図）見田方遺跡にもっとも近い



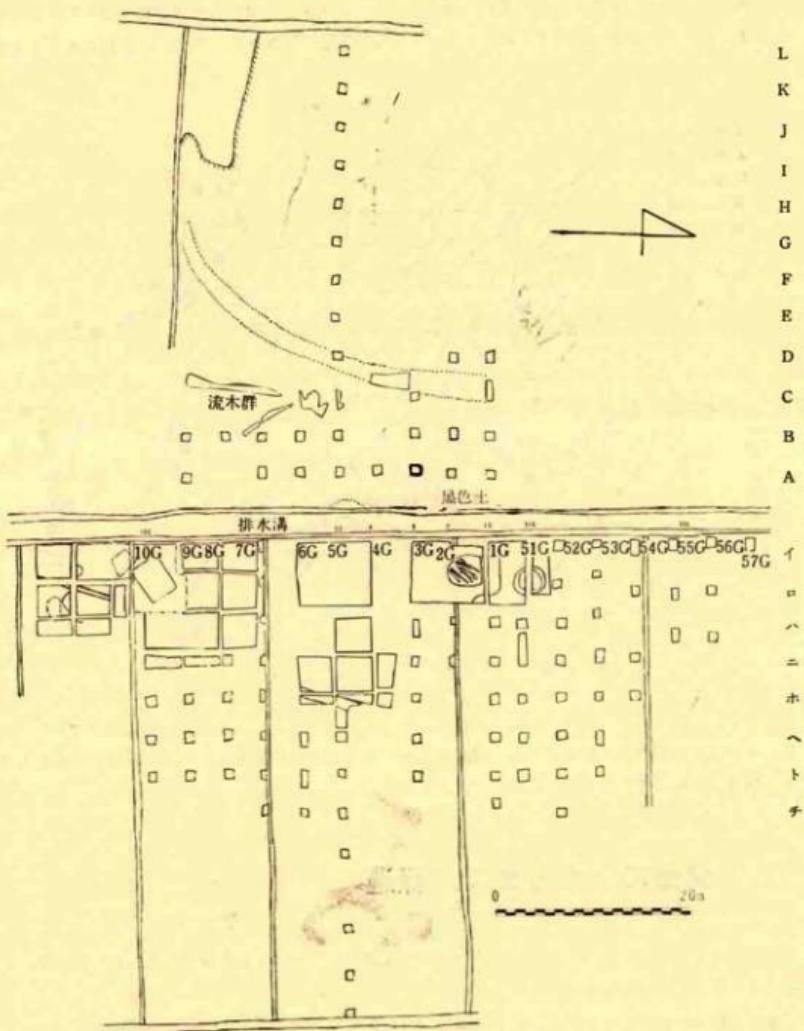
第8図 越谷付近の遺跡分布図

く。しかも低地状（現在畠地）に近い遺跡は、春日部市銚子口にあるようだが、未発掘のためそれとの関連はつかんでいない。（高崎 力）

II 発掘にいたるまでの経過

昭和35年2月、越谷市大相模地区の耕地整理事業進行中、通称「四条落し」といわれた近くに幹排水溝を掘っていたところからカメ1個が発見された。発見位置は水田面から80cmの深さで、黒色土層が舟底形にへこんだ底であった。関東地方でも陸地化の遅かった低湿地帯で、しかも水田の下であるところから、これが後に判明した住居址とは想像もできなかつたのである。なおその時、同じ溝に大木の根株の存在を確認している。昭和35年3月越谷市を訪問された稻村坦元先生に、このカメの鑑定を依頼した。

昭和36年の暮、耕地整理第二期工事がこのカメ発見地の南へ進められ、通称「一本杉」付近にい



第9図 見田方道路全体図

たっておびただしい土器片が発見されるにおよび、現地の調査と発掘土器の復元を行ない、土師器壺1個、須恵器壺1個を復元し、県社教文化財係に鑑定を依頼した。

昭和37年2月「一本杉」付近の小排水溝土手より、土錘1個、高杯1個を採集する。その間、県社教文化財係長柳田敏司氏の現地視察があり、住居址であることを断定した。その結果、今までの調査にあたってきた高崎力が、これまでの経過と現状をまとめた調査報告書を越谷市文化財調査委員会に提出した。

昭和39年、40年頃より「一本杉」付近の水田の土抜きが日立ち、このまま放置すれば住居址の破壊も考えられるにいたったので、何箇所かの試掘にもとづいた調査結果を昭和41年6月、埼玉県地域研究会にて発表した。同席していた不動岡高校金井忠夫氏が同年8月現地調査に来られ、冬季発掘の可能性があることを認めた。同年9月、金井忠夫氏、川越高松小泉功氏、資源研中村嘉男氏と地元の高崎の4名が越谷市教育長秋山長作氏を訪問した。歴史上貴重な遺跡であり、しかも緊急の発掘の必要があることで意見が一致した。

昭和41年10月、地主の発掘承諾を求め、県教委等に対し発掘許可申請をする。同年11月、越谷市長大塚伴鹿氏等市首脳の現地視察があり、同年12月16日「見田方遺跡発掘調査委員会」が結成される一方「発掘調査団」が編成され、同年12月25日より発掘調査が開始された。(高崎 力)

III 発掘経過 第9図参照(図版1の1・2)

1. 第一次発掘調査(昭和41年12月25日~30日)

12月25日

午前中、宿舎になっている越谷市福祉会館に集合した発掘調査団40名は、打合せをすませ直ちに現地に向う。一部は現地本部の建設にかかり、他は「一本杉」付近小排水溝の西側水田(30cm程土抜きしていた)に4m間隔に、北より1, 2, 3……、東よりA, B, C……、とトレンチを入れる。遺跡は土抜きで破壊又は取り去られ、1AGの黒色土層は小排水溝に傾斜、8BGに僅かの黒色土層をみた外は少數の土器片のみ、1CGから7EGに向って流路跡が見られたので、4CGにおいて2mの深さに掘り下げる。流路近くの東側の6CGに灌木の株の密生が見られた。

12月26日

作業開始8時40分。今日から小排水溝東側の水田にトレンチを入れる。溝から東へイロハ……、溝にそって北より1, 2, 3……とグリットを設定。各グリット共トまで1mの坪掘りを行なう。午前10時、1ロGから完型の鬼高式壺を掘りて凱歌があがる。8ロGの-30cmから土錘1個。午後に入り、1イGから1組の杯を掘りあてる。内1個は垂直に立っていた。5ホG、9ハG、6イGから多量の土器片出土。

12月27日

1イG北(後51イGとする)-40cmに黒色土層をみる。2イ-ロGにかけて黒色土層は隅九方形状に露出。6ロG-30cmから5~6本の木片と土器片数個、須恵器口縁部が出土。ここは黒色土

層が二層になっている。9 □ G - 20cmの黒色土層に土錐1個、軽石1個、その下 - 39cmにもう一層の黒色土をみる。8 イ G から石器出土。9 ハ G から杯1個、土錐1個、土器片数個、同北壁から大きな甕の一括土器発見——これは後に形が崩れた。

12月28日

前日に引続き黒色土層の追求に主力を注ぐ。1~3 G にまたがる黒色土層は、径 330 cm、中央部がくぼんでいることがわかった。この中から小石、甕、軽石が出土。5 イ G の黒色土は - 35cm ~ - 45cm へと小排水溝側に傾斜していた。6 イ G - 50cm から 60cm × 45cm × 1.5cm の板、土錐 1 個が出土。6 □ G から杯 2 個、土器片少數出土。9 イ G より土玉 1 個、甕 1 個。9 □ G から土錐 1 個、甕 1 個。9 ハ G の黒色土層は - 38cm で中央部はくぼみ - 60cm。5 ホ G に新しい杭 2 本と石器 1 個出土。——杭は後になって近年の物と判明。

12月29日

51 イ G は黒色土層がほぼ円形に広がっていることを確認。1~3 G にかけての黒色土は中央部が一段と落ち込み、4 本の用材が出土。黒色土の上部にうすく火山灰が見られた。5 イ G から土器片。6 イ G に甕数個。6 □ G から杯 2 個。8 ハ G は黒色土が二層にわかれ、小木片が介在していた。9 □ G から土錐 1 個(球状)、杭 1 本。10 □ G に高杯脚部、木片、土器片。10 ハ G は炉跡と思われる近くに粗一握みを発見。

12月30日

土器の整理と実測に一日を費す。夕闇の中帰途につく。

当初の計画では本日までであったが、作業の完結をみなかった。

整理調査(昭和42年1月3日~7日)

暮の発掘は意外に手間どり整理作業は年を越すことになった。その結果 1 G ~ 3 G にかけての住居址から用材 9 本が発見され、南東の隅に貯蔵穴が発見された。

8 ハ G 北壁 - 30cm から木器が発見され、10 □ G 南壁の下部から大きな板が露出するにおよび、発掘調査地を南へ拡張する必要が生じて来た。

2. 第2次発掘調査(昭和42年3月20~30日)

二次発掘の必要性については、一次発掘の終りに述べた。二次発掘は3月20日より一次発掘團とはほぼ同じメンバーにより行なう。今回は3月になり既に地下水の湧出がみられ、バチカル等の設置により排水しなければ作業は進められないという低湿地帯特有の障害に直面した。その上、天候不順で雨にもあい発掘團は泥んここの悲戦苦闘の連続であった。

3月20日 晴

第一次発掘同様グリット方式をとり、一次調査の南に 10~13 G を設定し、午前 10 時より発掘調査を始める。10 □ G は一次の際発掘され覆土されていたところで再発掘となる。

10イ G 耕作土の耕土

表土下 30cm に第一次黒色土層、その上から鬼高式土器の破片、須恵器の破片数個、有孔玉を出

土。

10□G 一次で確認された木材の再確認

土師器破片 杯の口縁部、木の実1個を採集。全体にじめじめしていた。

12イG 第3黒色土層までの排土作業

第1層-22cm、第2層-29cmは粘土の中にブロック状に介在。遺物は少ない。第2層(-32cm)から土師の斐の口縁部出土。

12□G 排土作業

30cmで第1黒色土層にあたる。濃淡がある。土器片2個。さらに4cm下の第2層から土師器破片多数。第2層は溝が北北東から南南西にかけ60cmの幅で切っていた。——この溝は後年のもの。

13イG 表土から20cm掘り下げたが、黒色土層は見つからなかった。

3月21日 曇後雨 全グリットとも掘り下げと写真撮影。

10イG 黒色第3、4、5、6層まで掘り下げる。第3層に土師器の口縁部1個、須恵器の口縁部1個、土錐1個出土。第4層は第3層と区別しにくく、その上に火山灰が薄くあった。径4.5cmの土錐1個、斐の口縁部、細い木7本。第五層から土師器破片2個。第6層は遺物がなかった。

11イG 排土作業

第三層より杯の口縁部片のみ。

11□G 排土作業

第3層まで掘る。12□Gの溝がここに続く。第3層の東側に土師器破片、全体的にみると西側高く、溝のところまで緩やかに落ち、溝の東は水平になっている。

12イG 排土作業

黒色第3層は東北部、南側、中央部にそれぞれ植物炭化層が見られた。第2層より新たに土師器壺底部。第3層南中央付近に土師器破片数個。西壁付近に第4黒色土層を確認。第5層確認のため北東、南東の隅を試掘するが、地表から1m掘っても探せなかった。

12□G 第1層の掘り下げ

第1層を掘り下げ、第2層面を露出する過程で、滑石製管玉47個、同じく飾玉1個を発見、玉は100cm×90cmの範囲に散乱していた。土師器は第2層から数個分。なお表土より28cmの第2層の土器片は火山灰らしき灰に覆われていた。

13イG 第2黒色土層まで掘り下げ、土器片5個採集。第3層では東側に土器が集中して出土。

3月22日 雨

殆んど作業はできない。今までの整理やミーティングに終始する。

3月23日 曇時々晴

昨日来の雨で各グリットとも溢水し、バチカルや可搬消防ポンプを使用して排水作業を行なう。その間にも湧水激しく、作業は困難をきわめた。作業のできないグリットもあり、配置転換を行な

う。午後3時、強風と小雨で作業中止。

12= G 午前中排水作業。午後南東隅から2層の黒色土を掘り下げ3層目を出す。

13イ G 午前10時まで排水作業。後に東へ30cm拡張し、第2黒色土層まで掘り下げる。今まで出土した土器周辺の清掃作業で、杯3個、甕1個を確認する。

13ロ G 午前中排水作業。午後、第3層を耕土し表土より30~33cmの第4層を露出する。土器片6個が散乱。第4層で北西端に、12= Gより続く溝を確認。14= G側に赤色粘土と灰色粘土の層の違いを見る。

3月24日 晴

朝のうち排水作業。各グリット掘下げと実測。

10イ G 午前、排水作業。午後、全体的に第6層まで掘り下げ。土師器片3個出土。

11イ G 午前、排水作業。午後、全体的に第5層まで掘り下げ。木片1個、西壁より75cmで土師器底部1個を出土。

12= G 排水作業の後、第2黒色土層を出す。この層はグリットの東側にて消滅。午後から土器群の周囲にある管玉（前掲）の実測。管玉3個紛失したらしい。下に灰褐色の粘土層があり、その中に大きな土器片を発見。

13= G 第4黒色土は褐色土を含み、4~6cmの厚み。その下に0.2cmの粘土層。第5黒色土層は0.5~1cmの厚み。

3月25日 晴

10イ G 排水作業後、第6層の耕土作業後各地点のレベルの測量に入る。

10= G 午前、第4層の土器群の20分の1測量。午後、南西にある木材の全貌を握る。板状であった。柱と思われる木材は傾きが土壤のゆるみで甘くなつた。北東隅に水はけ用の穴を掘るが、すぐに溢れて作業難行。

11イ G 排水作業の後、水かい出しの二つのピット内の第7黒色土層の続きを見るためトレンチを入れる。西=A、北=Bとする。Aは第7層まで表土から73cm、Bは54cmとレベルが違う。

3月26日 晴

湧水激しく、朝のうちのグリットも排水作業。

10イ G レベル測量。11イ G、10= G、西の排水溝の三方向に落ち込んでいる。須恵器破片3個、土師器破片7個。東壁の北端に炭化物、東壁のセクションをとる。

10= G 午前中、バケツリレーで水のかい出し、午後10イ Gとの境界の土手を薄くし、住居址の炭化面を追う。そこで木片の炭化物と土師器破片数点を発掘。東側に長い炭化木片が2本あった。

11イ G 10イ G側のセクションとりと、その土手の一部を取払う。

11= G 第4層の黒色土を耕土したところ、多数の土器片が出土。

12イ G 午前中、排水作業。後に北壁のセクションをとる。11イ Gとの境を一部取除く。

12□G 実測。

13イG 午前中、第2、3層上の土器群の実測、午後、第3層を堆土し、第4層を出す。中央部に焼土のかたまりと、その左寄りに焼土面がである。

13□G 第7層下に疎層があり、これの分布範囲を調査するため、紙、横十字形状に30cm幅の試掘溝を掘る。

13ハG 13□G同様、疎層の確認のため試掘溝を掘るが疎層はなかった。

3月27日 晴

10イG 南西隅の黒色土層の確認。

10□G 涌水激しく午前中は水のくみ出し。午後2時、ようやく乾燥する。

11イG 第6黒色土層を一面に露出させる。北面に落ち込みがある。

11□G 土器群を10分の1縮尺で実測。

12イG 東南部の黒色土層の落ち込みを調査する。

この黒色土の下部10cmに、白い小さな骨片が混入していた。土師器数片。

12□G 土器群の実測。

13イG 出土面の清掃。土器の実測。杯1個、甕1個、壺2個出土。

13□G 砂疎層を全面的に露出した結果、12□Gに近づくにつれて消滅。平板測量をする。

13ハG 第4黒色土、第5粘土層を除去し、第6層を出す。甕1個体分出土。

3月28日 曇

10イG 10□Gとの壁を取除く。住居址の床面まで粘土層をはがす。屋根材と覺しき炭化物が一面に出る。プランは2.9m×3.5mの方型、壁高20cm、南側に柱の残片。20×100cmの木材ができる。

10□G 涌水で作業難行。10イGからの住居址の床面を追う。

12イG 排水作業と住居址らしきコーナの追求。南壁から甕1個体分出土。

12□G 土器の取り上げ作業。甕1個はくぼんだところに逆さになって出土。その周囲は黄色土のブロックが逆「く」の字になり、くぼみには灰があった。

12ハG 掘り下げ作業。北壁近くより長甕2個体分。南壁近くより甕5～7個体分出土。

13イG グリット内を清掃し実測する。住居址らしき輪廓の溝には黒色土や焼土粒がつまっていた。

13□G 第3黒色土層まで掘り下げる。

13ハG 第7層(粘土層)を除去し、甕の土器片多数を発見。ひしの実3個。午後それらの土器群の測量。

3月29日 晴

10イG 住居址面の清掃と写真撮影。

10□G 午前中、水をかい出し、10イGとの境を取り去る。但し、焼土は残す。午後、炭化層面

を清掃し写真撮影。焼土面より土器1個体分出土。

11イG 10イGとの境を除去し、その付近で住居址のコーナーの部分を掘る。甕1個体分を取り上げる。

12イG 南壁断面図の作成。12イとロの壁を除去。

12ロG 南壁断面図および北壁断面図の作成。土器の取り上げ。ブロックは第3層の黒色土の上に乗っていた。

12ハG 清掃し、長甕を写真撮影。その時、東壁下に甕の破片を発見。さらに第3層まで掘り下げる。土器破片2～3個体分見つかる。午後、北壁付近の土器の実測。

13イG 住居址の清掃と写真撮影。その後、グリットの四隅にピットを掘るが遺構はなかった。

13ロG 平板測量、砂礫層のセクションを見たが、炭化物層がほぼ水平に堆積し、その下は粘土層になっていた。

3月30日 晴

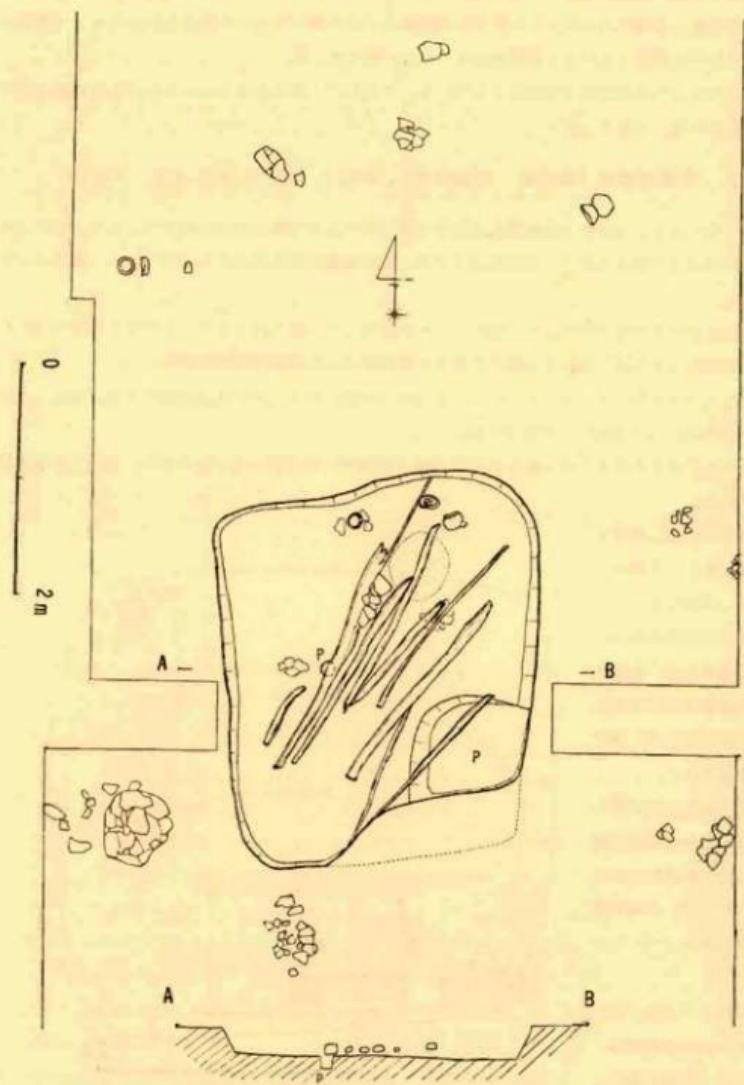
10イ・ロG の遺物の取り上げ後、大部分の団員を動員して、この住居址床面をはがしてトタンの上に乗せ取り上げる。取り上げた床面は宿舎に運搬し、部分毎に写真撮影をし保存することになった。夕食後、解散をする。(高崎 力)

N 住居址と遺構

1. 1号住居址(第10図)(図版2の1, 3)

これは第1次調査において、形態を完全に把握できた唯一の遺構である。2イ、2ロ、3イ、3ロの4グリットにわたって発見された。平面形は不整ではあるが隅丸長方形で長軸はほぼ南北をさしている。大きさは南北3.2m、東西2.8m、深さ30cmである。北東隅がやや大きく外に向かってふくらんでいるが、南東隅はその逆に内側に向かって張り出している。壁の大半は垂直に近く切りこまれているが、南壁の東半はゆるやかな傾斜をなしている。壁溝は見い出せなかった。床面は灰青色粘土であり、概して南西部が高く、北東部は低い。踏み固められた跡は見い出せなかった。柱穴と思われるピットは住居址内中央寄りに1個所発見されたのみである。径12cm、深さ10cmの小さなもので黒色土が若干つまっていた。北東寄りには63×55cmの楕円形で、約4cmの厚さをもつ焼土があり、これが炉とみられる。南東隅には南北85cm、東西96cm、床面よりの深さ25cmのピットがあり上部には黒色土、下部には褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかったが、これは貯蔵穴と推定される。

床面上4～10cmの高さには、長さ29～60cmの木材が、いずれも北東一南西の方向を指して、床面全体をおおうように平行に倒れていた。長さも太さも不揃いではあるが、炉、柱穴、貯蔵穴などをおおっていた。さらに木材により割れたのではないかと思われるような土器片や、木材の上にのっている土器片などもあるので、これらの状態からみてこの木材はこの住居址の用材であろう。



第10圖 1号住居址実測図

遺物は住居址の床面に接しては、主として高杯、杯などが北半部から出土しているが、長甕などは見られなかった。しかし住居址の周囲からは多量の土器が出土している。横倒しになって発見された堆や完形の2個の杯が一方は直立して、一方はややかたむいた状態で発見されている。これらは第1造橋との間にあった。また住居址南西隅のすぐ外側に半火の石20数個がかたまって発見された。これが住居址とどのような関連をもつかは不明であった。

この付近からは長甕形土器が出土している。これらの土器からみると、本住居址の時期は鬼高窓と推定される。(坂本 彰)

2. 2号住居址(第11図)(図版3の3、4の1.2、5の1.2、6の1.2.3、7の1)

10イGに主としてかかる有機質第6黑色土層を掘り込んで築かれた住居址で、その大きさは、 $3.7m \times 2.5m$ の隅丸方形で、床面にはカヤその他の建築用材が炭化した状態でかなり調密に存在していた。

とくに西壁南半分の壁際には、壁の土止めに使用したと思われるカヤ、ワラなどの炭化物と共に、直径約4cmの炭化した丸太状の木材片がほぼ並立した状態で認められた。

また南壁中央部に近い床面直上には、中央部の片側に切り込みのある板状の木材が炭化した状態で(幅20cm長さ約100cm)発見された。

さらにそのすぐ北側で柱とみられる丸太状(径10cm)の用材が途中から折れ、直立した状態で発見された。

東北隅に近い北寄り

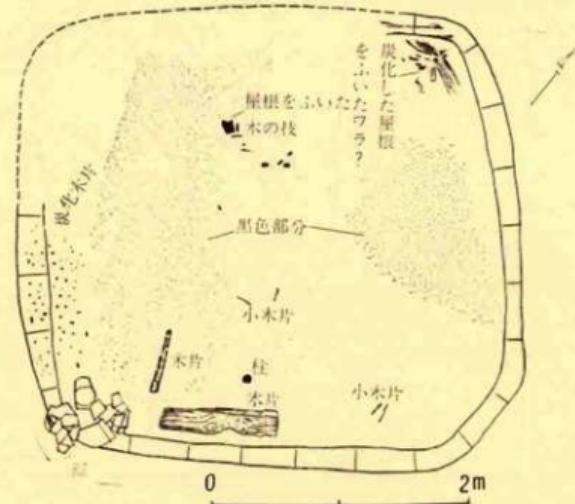
の壁で焼土(径20cm)

が少し認められた。

南西隅の床面直上から長甕形土器の完形品が3個体分が何れも口縁部を住居址内に向けて発見された。

住居址床面に密着して検出された建築用材は、全て床面の上と共に取り上げ、市教育委員会に保存されている。

これらの建築に関係する植物性の遺物は、おそらく洪水が襲い、厚い黒色粘土層の堆積



第11図 2号住居址実測図

に覆われたために、炭化した状態で残存したものと思われる。

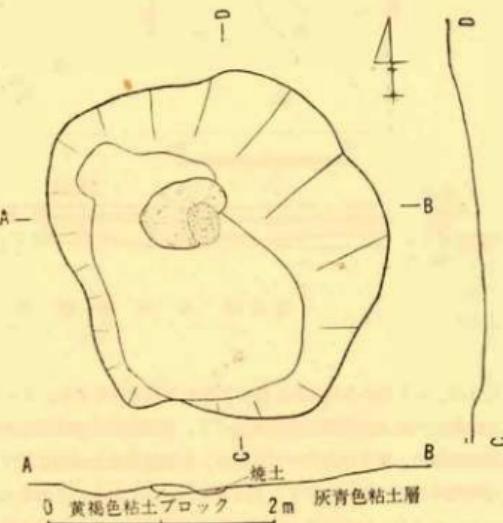
覆土と床面の土層は判然と見分けがつかず、たまたま竪穴住居址の炭化した建築用材の植物の存在によって区別することができた。しかし柱の位置については、柱材の残っていたもの以外は、覆土と床面の土が同一のため、その柱穴を明らかにすることはできなかった。従って柱の位置は実測図の柱材にもとづいて推定する以外に方法はないと考えられる。(小泉 功)

3. 1号遺構について(第12図)(図版2の2)

51イ、ロおよび1イ、ロの4グリットにまたがっている。南北3.4m、東西2.9m、深さ20cm程度の浅い落ちこみである。明確なプランはつかみえなかったので不規則形とでも呼んでおく。遺構は第1黒色土面から落ちこんでおり、第1および第2の黒色土層が周囲からはりこんでいたが、遺構内部ではその範囲を明確にとらえることはできなかった。壁は殆んどだらかに立ち上がっており、平坦な床面との区別もつけにくく。壁および底面に多少の凹凸はあるものの、全体として問題とする程のものではない。中央やや北東寄りに径20cmの焼土が厚さ約4cm堆積しており、その北から東側にかけて幅20~40cm、高さ10cmの黄褐色粘土ブロックがとりまいていた。このブロックは黒色土面上ではなく、灰青色粘土面上にあった。

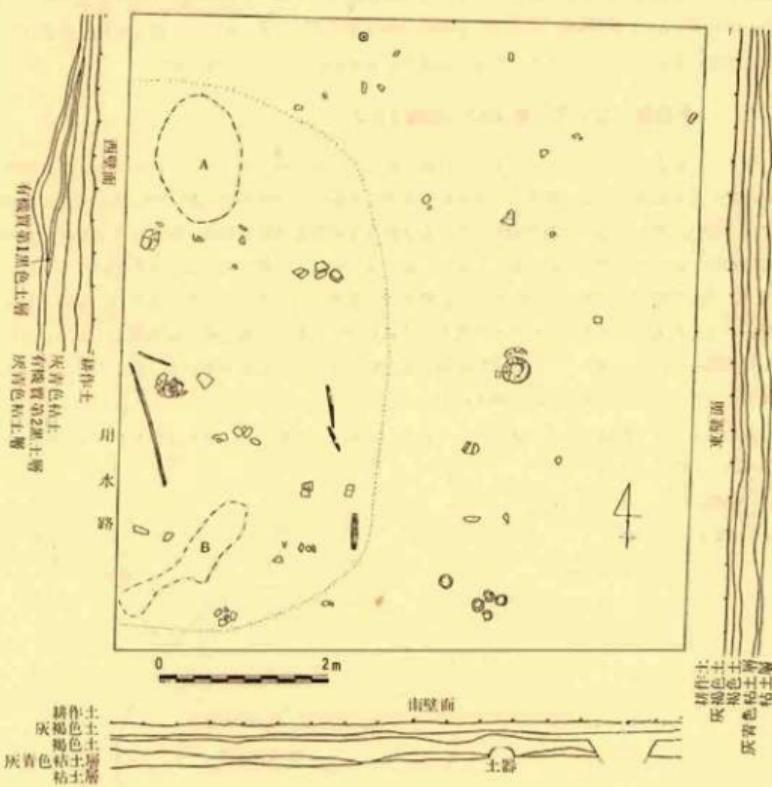
遺物は若干の土器小破片が覆土中に見られたのみで、周囲からは菱形土器片および内面に跡を持つ壺などが出土しているので、遺構の時期は鬼高期と考えてよいだろう。

(坂木 彰)



第12図 1号遺構実測図

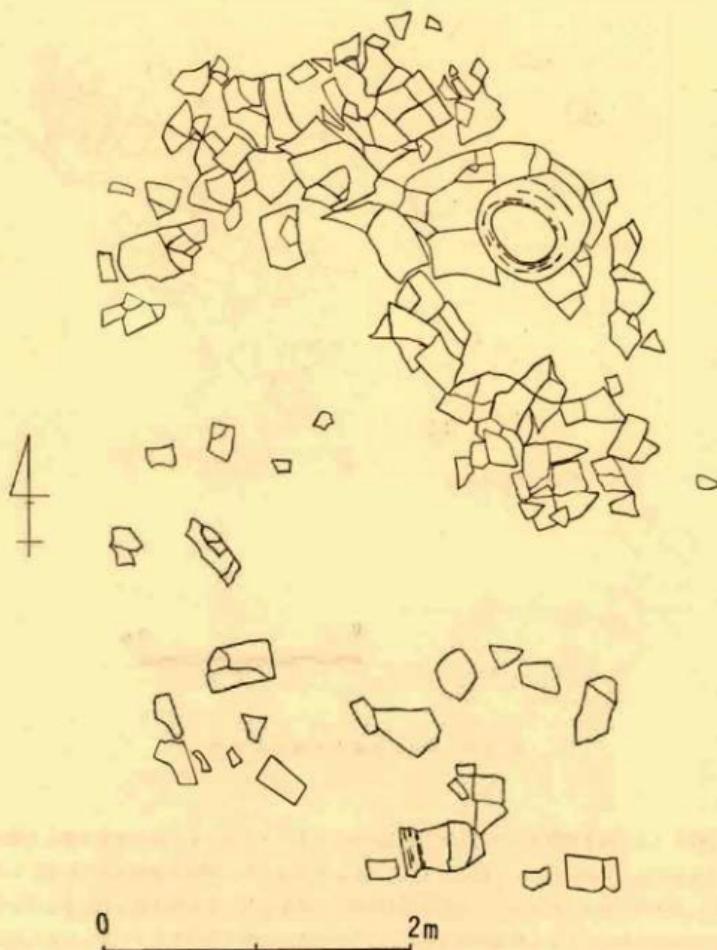
4. 2号遺構(第13、14、15図) (図版3の1、2)



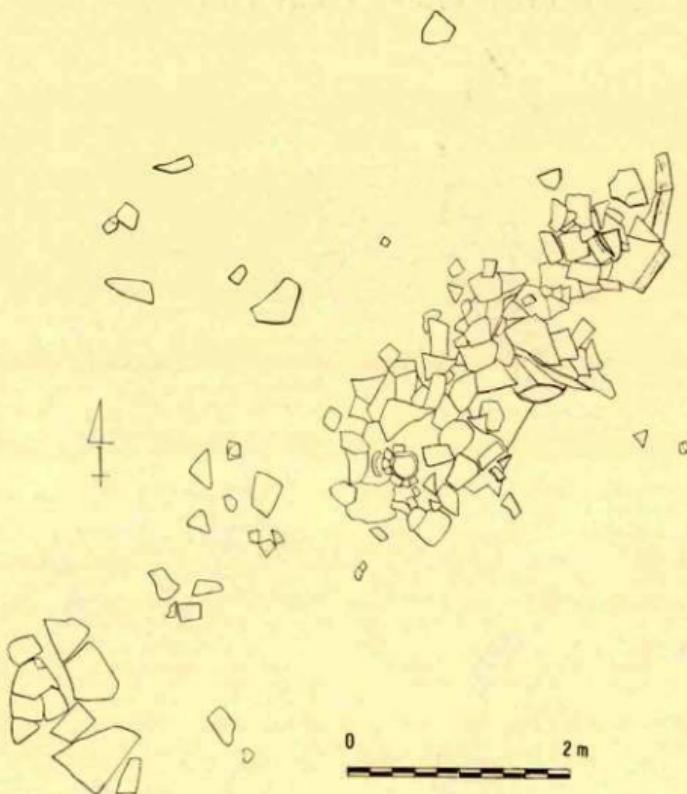
第13図 2号遺構実測図

5イG、6イGにあらわれた落ちこみを2号遺構とする。ここも5イ、5ロ、6イ、6ロの4グリットにあらわれた有機質黒色土を追って、全部を掘り上げたものである。範囲は東北7m、東西3mの半円形で、深さは約50cmであるが、有機質黒色土は西に接する排水路の断面および排水路をこえた西側の5A、6Aのグリッドにもあらわれており、これをも計算に入れると東西約8mの円形となる。セクションが示すように灰褐色土層の下は灰青色粘土層と有機質黒色土層が互層をなしている。5イ、6イのグリッドは2つの有機質黒色土層が全面にあり、5イGでは第3黒色土層の存在も明らかにされたのであるが、その範囲をとらえることはできなかつた。

落ちこみはなだらかな傾斜をもって中央部に向かい搭鉢状にくぼんでいる。1号道構と同様な状態であったが焼土や灰などは発見できなかった。また極端な凹凸も見あたらなかった。



第 14 図 2 号道構内土器出土 状態 A



第 15 図 2 号遺構内土器出土状態 B

遺物は 5 イ G では有機質第 1 黒色土層上を北西から南東へ（A図）6 イ G では第 2 黒色土層上を南西から北東に（B図）向かって投げこまれたと思われるような土器群が発見されている。いづれも南東、北東の方がレベルが低く、土器には大形破片が多く、これらは明らかにまとまって捨てられたものであろう。5 イ G 北東部では完形の壺が逆さの状態で発見されている。しかし付近に遺構とみられるものは見当たらず、また他の遺物もなく、全く単独で出土している。

6 イ G の有機質第 2 黒色土層では長さ 35cm から 150cm の 5 本の木材が発見されている。そのうち 1 本は東西を向いていたが、他はすべて南北方向に倒れていた。6 ロ G の南西部では 4 個の壺が

まとまって出土し、さらに西側にも同じような形の环が1個発見されている。いづれも有機質第1黑色土層上にあり、倒れているものではなく、すべて置かれたように位置していたと推定される。また5ロGと6ロGの境界の部分では、壺形土器が直立した状態で発見されている。しかし、ここでもこの土器と関連する遺構などを見い出すことはできなかった。なお、この壺形土器は発掘後極少破片となってしまい復元することはできなかった。

4ハ、ニ、ホG、5ハ、ニ、ホG、6ハ、ニ、ホG

ここは5ニGにあけたテストピットにおいて、有機質黒色土の存在が確認されたので拡張したものである。まず、5ホGのテストピットを中心にして北へ5m、南へ4m、幅約1mの部分を掘り、次に西へ8m、幅1mの部分を拡張した。この段階で有機質第1黑色土層の北限および西限がわかったので、住居址かもしれないという疑問が生じた。そこで5ニG、5ニGの残りの部分と4ニGの南半部とを掘り進め、さらに南側の限界を追って6ニGをも掘りあげた。その結果、南限はさらに南に伸びているが、東側はほぼ南北に継続する幅2mの溝（後世のもの）によって切断されている。そして、住居址ではないことも判明した。

遺物の出土状況を見ると、土器片は主として有機質第1黑色土層から出ているが、他の地点にくらべると少なく、有機質第2黑色土層にはほとんどなかった。また4ニGと5ニGの境付近で砾石と思われるものが発見されている。4ニG南半および5ニG北半の有機質第1黑色土層からは木片が出土したがその性格については不明である。（坂本 彰）

5. 3号遺構（図版7の2）

当遺構は11イGに属し、第4黑色粘土層から第6黑色粘土層まで掘り込んで、第7黑色粘土層を床面とする隅丸方形で、摺鉢状を呈する。この摺鉢状遺構の床面の大きさは径約2m、第4黑色粘土層と第7黑色粘土層の高さは9cmほどで、若干の土器片を北西部で検出したのみである。この遺構を住居址として認定する有力な遺構や遺物は発見されなかった。

しかし、第4黑色粘土層を切り込んだ摺鉢状を有する何らかの遺構であることはほぼまちがいないと思われる。（小泉 功）

6. 4号遺構、5号遺構（12イ、ロ、ハ、13イ、ロ、ハ、G調査区）（第16、17、18図）

（図版8の1.2、9の1.2）

1967年3月20日より、この地区的発掘開始。前年度末に第1住居址より板状の材木が伴出したので、この地帯を濃密な遺物分布地区、遺構集中地区と判断し、12イロハ～13イロGを発掘した。12イGは若山民雄、越田賢一郎、12ロGは松尾鉄城、鈴木正彦、13イGは山口隆夫が責任をもって発掘する。20日には12イGでは第1黑色土層に達する。表土の耕土中から数片の土器片出土、第1有機質黑色土層下2cm～5cmに第2黑色土層が現われた。13イG東側では土器が集中して伴出、出土状況は第3黑色泥炭層の上に散乱しており、明らかにいくつかまとめて土器が置かれた状態で出土した。第1層、第2層の有機質黑色土層はグリットの大部を覆っており、

西北隅以外は第3黒色土層以下は存在しなかった。23日には手をつけず、24日第3層泥炭層をはがす。その下に第3黒色土層がほぼ全面にあり、東側では第4層が厚い。東南部に黒色土層の落ちこみがあり、越田賢一郎の日誌によると、黒色土を一部はがしたところ灰色をなす灰であること。有機質黒色土層中に白い小さな骨片がはいっていることを指摘している。この畳状の落ち込みに灰が堆積し、骨片があることは非常に重要な問題を示しているものと思われる。灰層が低湿地の条件下にあ



第16図 12世紀 Goto土器出土状態

ると何色を呈するか注目される。水分を含むとき黒色に近い色を呈するのは、おそらく有機質を含んだ灰層であるからだと思われる。灰が存在していることは、ここで日常生活が行なわれたことを示し、はっきりした堅穴住居址とともに、ここが集落址である有力な証拠と思われる。また細骨片はどのような動物か不明であるが、現在まで残るすれば管状歯骨か、水鳥の骨の可能性もある。鑑定に耐えない粉末状で、どちらともわからない。指の先にのせてつぶすと灰色の粉末になり、大きさは粟粒大である。歯骨とすれば、この水郷のような集落でも動物の狩り場を持っていたことになり、水鳥の骨なら付近に沼のような水域の存在していたことを暗示するものであろう。この畳状の落ち込みはセクションで見ると、すべて第2有機質黒色土層から落ち込み第3～4有機質黒

色土層も落ちこんでいる。明らかに第4有機質黒色土層以前に皿状のへこみがあったと思われる。この皿状のへこみの中は、灰が層をなしている。また出土した長甕は山田芳雄の3月28日の日誌によると「長甕は口縁を北に向けて倒れ、上から力によりおしつぶされた状態になっており、上は耕作土層の最下層から始まり、第2黒色土層に達し、第2有機質黒色土層は長甕によってへこんでいたが突き破ってはいなかった」と指摘している。

12□G調査区

3月20日表土排除。中央に溝発見。表土下23~28cm主に25cmで第1有機質黒色土層に達する。耕土層(表土)は8~15cmある。溝は現代の耕作土と同じ土であり、現代耕作面もしくは江戸時代の耕作面のところに作られた配水溝のような小溝であったと思われる。溝は切断面上部で幅62cmを測る。第1有機質黒色土層下1~5cmで第2黒色土層がある。21日杯が多数出土した周辺に滑石製小玉が散在していた。これは第2黒色土面上にあり、杯も同じである。鈴木正彦の3月21日の日誌によると「1個体になる土器が5個体出土。この土器は黒色の第2層に接している。そしてこの土器の面を火山灰のような砂が拡張部全面におおわれていた。」と記している。「同日小玉48個出土、滑石製品1個出土、南側に2個体

分の土器が出土、うちひとつ

は甕、そのまわりに焼土らし

きものが覆っている」と、3

月21日の松尾鉄城の日誌に記

している。第3有機質黒色土

層を全部はがすと床面状の平

らな堅い面が現われる。柱穴

は勿論発見されず、このよう

なところでは実際問題として

柱穴の中の埋土と周囲の土と

全く同質であるので、木の柱

が残っていないかぎり確認で

きない。この堅い面は堅穴で

なく平地住居址にも見える。

セクションを検討したが、落

ちこみ跡はみられない。細い

溝状の周溝状のもののがぐ

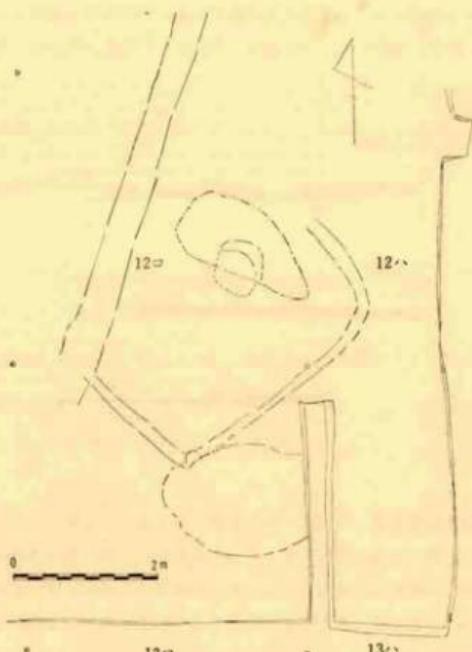
っており、柱穴は発見されず

周溝は隅丸長方形を呈してい

る。ここでは住居址の可能性

もあるが第4遺構とした。そ

の性格はわからない。これは

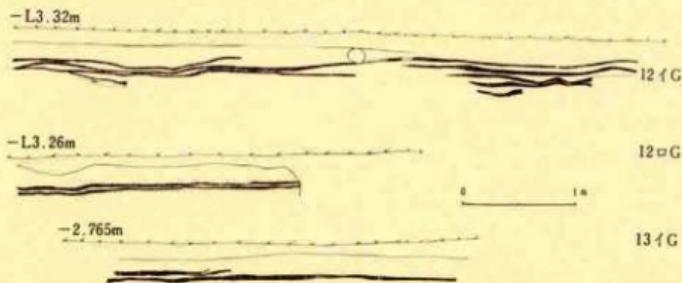


第17図 12、13□、△G遺構区

小玉や杯の出た面より 1 層下でこれとはなんら関係はない。鈴木正彦の日誌によると、12□G の南側で出土した土器群は甕が大部分であり、焼土（？）らしき黄色土層があり、27 日には瓶の破片と下から甕が出土、その周囲に黄色のブロックが出土し、初めこれを「かまと」と推定したが、この黄色土層は粘土の堅い面に密接せず黒色土層の面上にあるので結局これは「かまと」でないことになった。

12ハG 調査区 3月25日に発掘、27日に北壁よりに2個体分の長甕、南壁より5~7個体分の甕が出土。第3層直上より1~2個体分の胴長の甕または瓶が出土した。

13イG 調査区 3月20日より発掘、第2有機質黒色土層には数片の土器片が出土。第3有機質黒色土層に多量の土器が出土した。東側に出土した土器群は杯3個体、甕1個体である。第4層面上に焼土があり、灰層が一面に分布している。計4個体の土器は粘土面上にあった。東側にかけてへこんでおり、そこには全部灰層がつまっていた。焼土もあり、土器が焼けている。27日第4層を清掃すると住居址の周溝のような輪廓が出てきた。周溝内には黒色土層がつまっている、焼土もまじっている。周溝の内側は堅い床面状の粘土面があり、周溝の外より堅くて平らな面のように思われる。セクションには落ちこみは見られない。柱穴はない。プランは隅丸長方形を呈し、その一部がこのグリットにかかり、大部分は未発掘である。住居址の可能性もあるが、単なる造構とし第5造構とした。28日、四隅にピットを掘る。それ以下に黒色土層がなく終了した。



第 18 図 12イG, 12□G, 13イG 南壁断面図

13□G 調査区 3月23日から発掘。13□G では土器片は殆んど出土せず黒色土層があるだけであった。第1有機質黒色土層、第2有機質黒色土層、第3有機質黒色土層があり、第2有機質黒色土層中に土器片が少量出土した。第3有機質黒色土層下は粘土面があり、ほぼ水平である。

13ハG 調査区 第2有機質黒色土層中に7~8片の土器が出土した。（中村嘉男）

7. その他の遺構

8イG調査区（第19図）

遺物包含層は表土下約30cmの褐色粘土層の下部で有機質黒色粘土層の上面に接して認められ（標高2m78~82cm）グリットの北端は、最近の溝によって搅乱されている。グリットの東南地区で有機質第2黒色粘土層上面から土鍤が土器と共に出土している。

8ロG調査区（第20図）

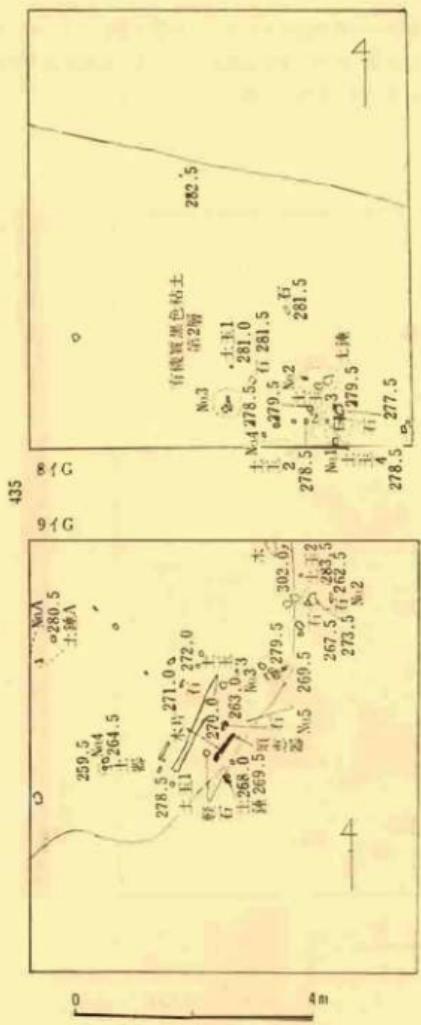
有機質第2黒色土を基盤とし、この上面に遺物は出土するが当調査区では北壁の東よりの一部に若干土師器片の散布が認められ、南壁により有機質第2黒色土から土製球状粘土玉の土鍤が土師器片や須恵器片と共に出土した。このグリットの大部分は黒灰色粘土層から溝が掘りこまれ搅乱されている。

8ハG調査区（第21図）

当グリットも北西と東南、および東北隅付近に一部の有機質第2黒色粘土層が認められ、若干の土師器片を出土するのみで、大部分は黒灰色粘土層から溝が掘りこまれ搅乱されていた。

9イG調査区（第19図）

有機質第2黒色土は、8イGから9イGの中心より西北にのび、東南部の灰色粘土層に接触している。遺物は、その有機質第2黒色粘土層上に散布している。須恵器や長甕と共に鉗鍤状の土鍤2個、球状の土鍤3個および軽石が出土している。また自然木と思われる植物が散在している。灰色粘土層からは、ほとんど遺物はみられ



第19図 8イG、9イG 遺構図
(G内数値はcm)

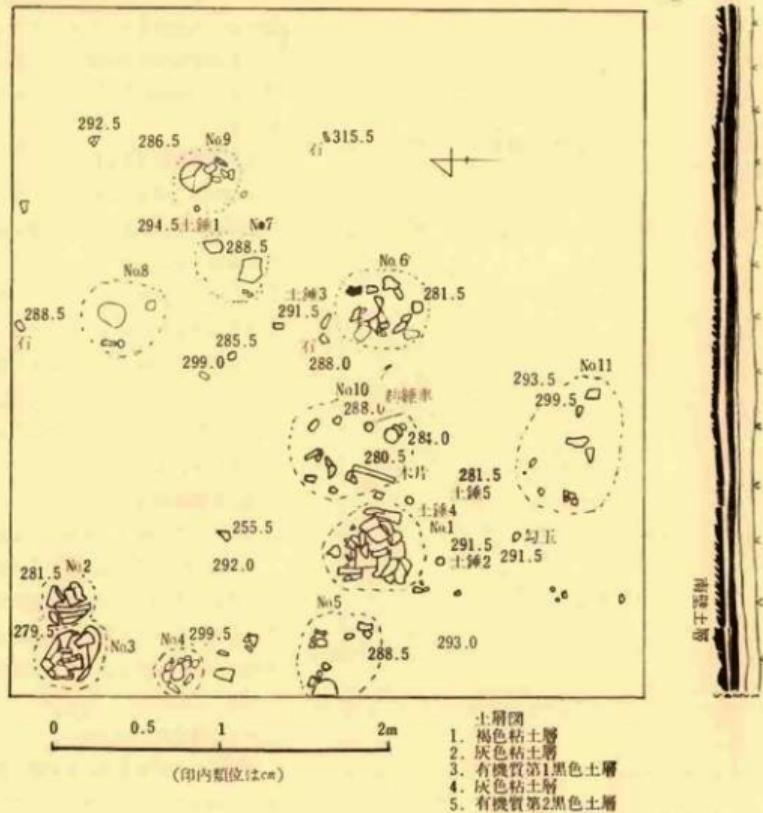
面に散布している。須恵器や長甕と共に鉗鍤状の土鍤2個、球状の土鍤3個および軽石が出土している。また自然木と思われる植物が散在している。灰色粘土層からは、ほとんど遺物はみられ

ない。

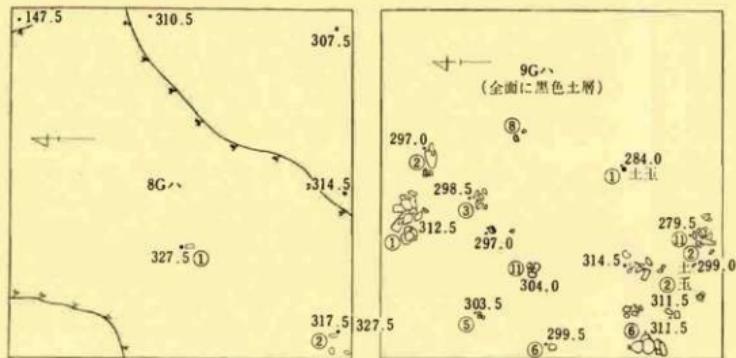
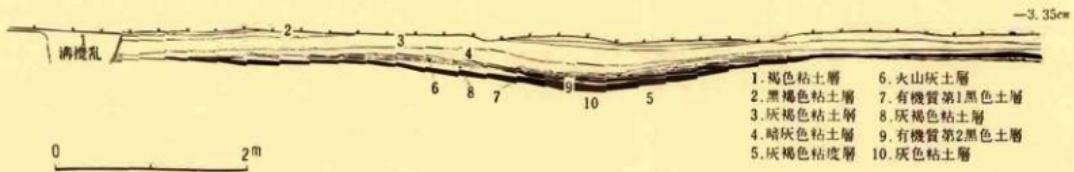
9 口 G 調査区 (第22図)

この調査区でも有機質第2黒色土上面に遺物の存在が認められた。この第2黒色土は、西 (9イG) に傾斜している。遺物は、中心部より東南部にかけて多量に散布している。長甕を主とする完形品が多く、滑石製紡錘車が1個、土鍤が5個、滑石製勾玉1個が出土している。

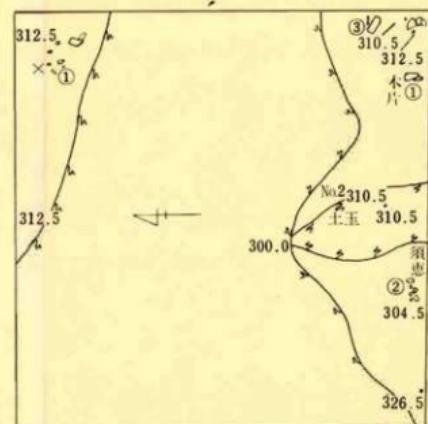
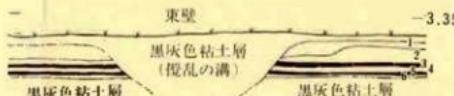
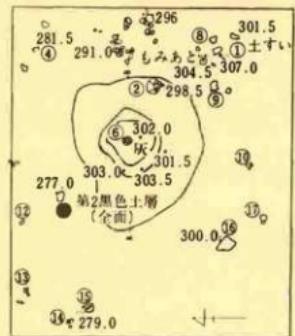
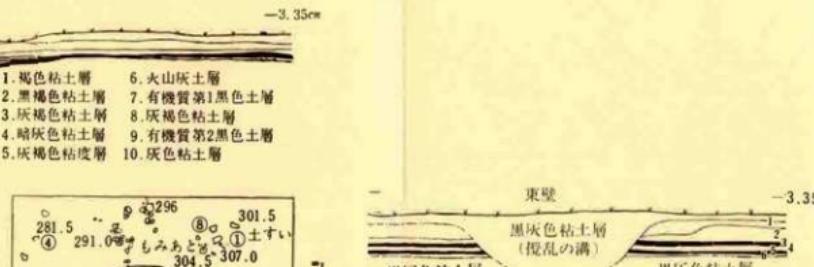
3.30-



第22図 9口G 遺構実測図



第21図 8ハG, 9ハG, 10ハG 道構
(G内数値はcm)



第20図 8ロG 道構
(G内数値はcm)

1. 灰色粘土層
2. 黒褐色粘土層
3. 有機質第1黑色土層
4. 灰色粘土層
5. 有機質第2黑色土層
6. 灰色粘土層

9ハG調査区（第21図）

この調査区でも有機質第2黒色土層上面に遺物が認められ（標高290～300cm内外）完形品は坏1個、土錐1個、北壁中央部付近で長方形土器1個がおしつぶされ、かなり磨耗した状態で出土している。遺構と思われる掘りこみなどは見分けることができなかった。これは覆土と床面および壁などの土質が全く同じで識別しにくいためであろう。

10ハG調査区（第21図）

有機質第2黒色土は、全面に亘がっていた。中央部には、この層の下にある灰色粘土層がやや高く盛り上がっており、その形状大きさは、東西径約1.55m、南北1.35mで北側を少しえぐられた円形の炉と思われる遺構が認められた。その中央部も径50cmの円形状で灰が全面につまつておらず、またその中心部には、變形土器片が伏せた状態で検出された。この土器および灰を取除いた下部は、遺構の基盤になっている灰色粘土層がくぼみ、その一部は焼けてブロック状となっていた。

当グリットの有機質黒色土の全面に磨耗した土器片がつぶれた状態で土錐1個をまじえ散布していた。

このが遺構と思われるもの以外には遺構として確認できるものはなかった。図の土層図に見られるように有機質第2黒色土の包含層もうすぐ、遺構のたち上がりを確認することが極めて困難である。覆土と遺構との層序的差異をつかむことは、有機質第2黒色土のみで、柱穴等の土は床面と同一の灰色粘土層が入りこんでいるため識別することができず、したがって住居址遺構などを確認することはできなかった。（小泉 功）

V 遺 物

1 土 器

1イG出土土器

培形土器（第23図1）（国版12の3）

口径9cm高16cm胴部最大径13.1cm。口縁部内外面には、丹念な横なでが認められ、胴部外面はヘラ削りが施されている。胎土には砂粒を含み、接合痕が二条認められる。第2黒色土層中出土。

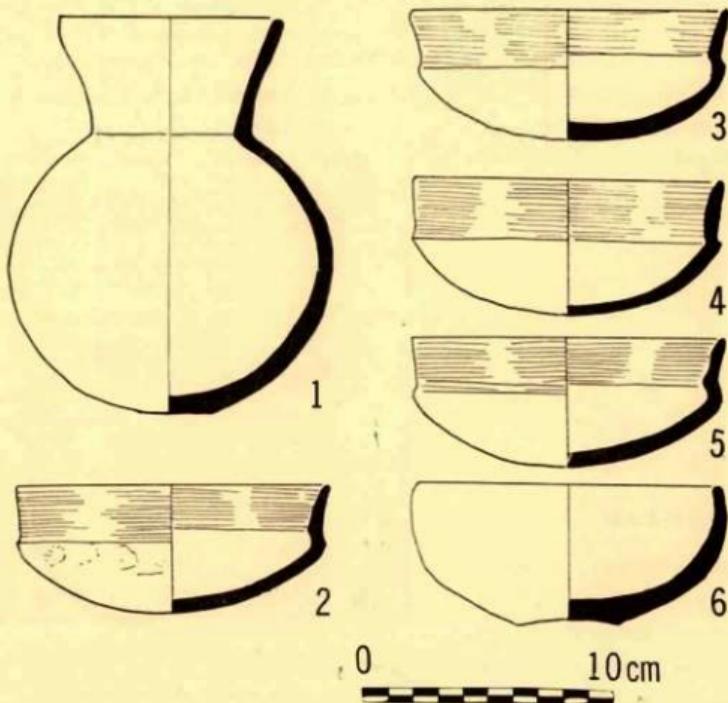
坏形土器（第23図2～5）（国版10の6・8・9）

ほんの少し外反する口縁と、その下に内外面とも明瞭な破をもつ。口縁部内外面は横なでを加え後より下の胴底部外面はヘラ削りを施しているが、この内面およびヘラ削りの上に何か調整があつたかどうか不明。2は口径12.5cm、高さ5.3cm、細砂を含む。焼きはあまり良好ではない。3は口径12.7cm、高さ5.3cm、つなぎの砂は少なく、精選された土が用いられて、焼成もよい。4は口径

12.5cm、高さ 5.2 cm、細砂を含む。焼成あまりよくなく黄褐色を呈する。内外面に紅彩の痕跡が認められる。すべて第 2 黒色土層中出土。

塊形土器（第23図 6）（国版10の3）

ややきつく内湾する口縁部と、中央の凹んだ平底をもつ塊形土器。口径12.4cm、高さ 5.6 cm、砂粒を含む胎土は普通の焼き上りを示して、赤褐色を呈する。器面の荒れが著しい。第 2 黒色土層中出土。



第 23 図 1 イ G 出 土 土 器

2イG出土土器

壺形土器（第24図1・2・4）

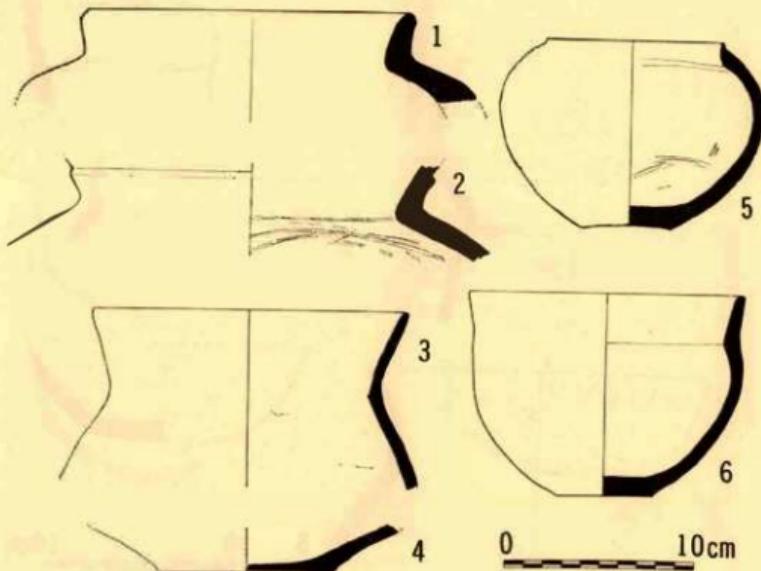
厚手のつくり、肩部が張る。壺形土器の一類かも知れない。1は口径17.5cm。2は頸部破片で、肩部から「く」の字に近く折れて立ちあがる口縁部は、稜をもっている。4は大きな底部で、ゆるやかな肩部が、続くのであろう。器肉の薄いつくりである。

壺形土器（第24図3）

1号住居址中より出土した大形破片。口縁内外は横なで。多量の細砂と若干の雲母を混ぜた胎土は精選されたものであって、焼成も堅緻で、灰褐色を呈する。肩部内面は横位のヘラなでを施すが、不十分で、右下りの二条の接合痕を認める。

盤形土器（第24図5）（図版11の4）

5は短頸壺形土器とすべきであろうか。口径9.3cm、高さ9.6cm。ヘラ削りの底部から立上って内屈した肩部は、内外面とも横なでの短い口縁部につらなる。肩部内面はヘラなで。焼成普通で、褐色を呈し、若干のススが付着している。



第24図 2イG・2ロG出土土器

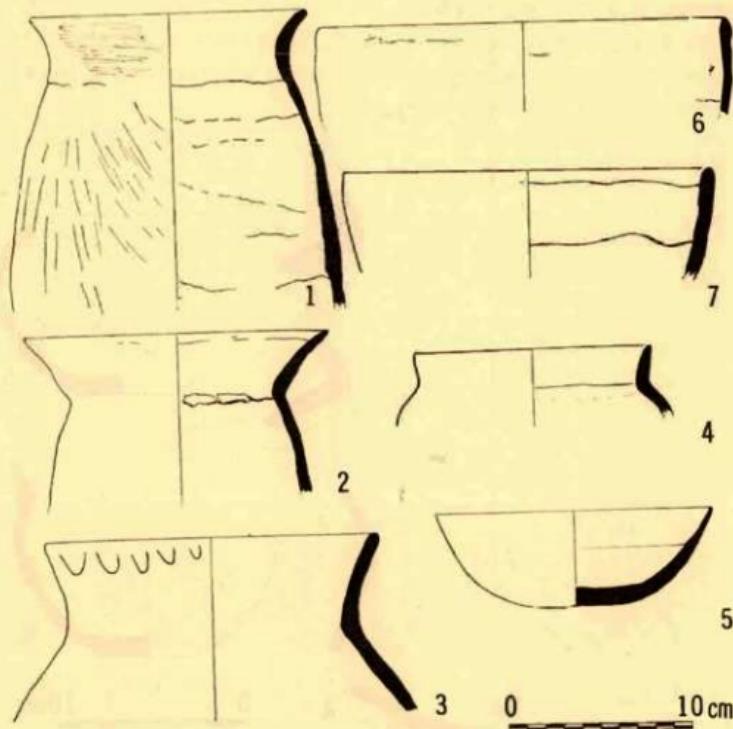
2 口G出土土器

盤形土器（第24図6）（図版10の10）

口径14.5cm、高さ10.7cm、小さな平底から内溝する胴部につらなり、口縁部は若干外反する。口縁部内外を横なで、胴部外面は荒いヘラ削り痕、ススが付着している。

5 イ G出土土器

變形土器（第25図1・2・4）



第25図 5 イ・ロ G出土土器

1・2は長胴になり、4は肩の張る變形土器であろう。1は粗雑な造りで接合痕が著しい。口径14.9cm。2は全体からみて、大きな外反する口縁が付されている。口径22.3cm。4は短くてやや開く口縁でともに第1黒色土層中より出土。肩部は張り口縁径13cm。

變形土器（第25図6・7）

口縁部のみ残片、推定される口径は6が22.3cm。7が20.8cm。口縁部は、ほぼ真っすぐである。胎土、焼成とも良好、第1黒色土より出土。

5 口G出土土器

變形土器（第25図3）

口縁部の径17.8cm。ゆるく「く」の字に外反する口縁は、その端部は、指圧痕がめぐる。頸部以下はヘラ削り。細砂を含む胎土。焼成不良。黒色土層出土。

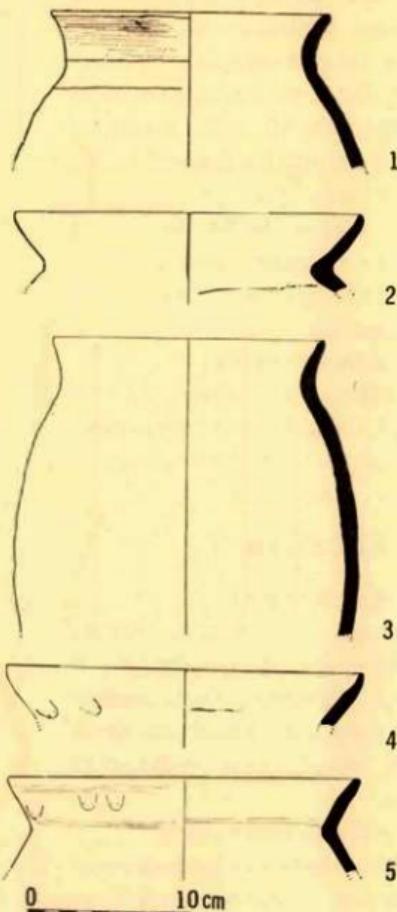
環形土器（第25図5）（図版10の1）

口径15.1cm、高さ5.2cm、口縁部内外面を横なので、内面に明らかな段をもたせている。胴部以下は、ヘラ削りが施こされている。砂粒を多量に含んだ胎土で、よく焼きしまっている。

6 イ G出土土器

變形土器（第26図1～5・27図1～7）

ほとんど、長胴の變形土器であるらしいが、2は胴の大きくふくらむ器形かと思われる。また、26図1・3、27図3・4の小口径のものと、26図4・5、27図1の大口径のものとがあり、27図2・5のような器内の薄いものもあるが概して厚手の造りである。26図4・5に顯著なように、口縁部を指で押圧し、横なので施しており、胴部は、ヘラ削りを加えているらしいが器面の荒れがひどく、あまりよくは看取できない。26図1には接合痕が認められる。口縁部は、外方に強く開反するものではなく、むしろ、わずかに外反する類いの口縁が、中ふくらみの胴部から立上るのを特長としている（特



第26図 6イG出土土器の1

に 27 図の 1・3) 27 図の 1 は口径 17.3 cm、灰褐色、第 2 黒色土出土。26 図の 3 は口径 16.7 cm、胴部最大径 21.2 cm で、焼成良好で灰褐色、粘土層より出土。26 図 4 は口径 22.1 cm、指圧の成形痕が残っている。砂粒を多く含んで、焼成堅歯。26 図 5 は口径 21.6 cm、粘土層出土。26 図 2 は口径 18.4 cm、頸部内面に指圧痕を残す。胎土中に、砂粒と雲母が認められる。焼成不良、粘土層出土。27 図 3 は口径 14.7 cm、胎土は砂粒を多量に含む。灰褐色。粘土層出土。27 図 1 は口径 21.5 cm、砂を多く含む、焼きしまりのよい、褐色の土器。第 3 黒色土出土。27 図 5 は口径 18.5 cm、粘土層出土。27 図 6・7 は長脚変形土器の底部であろう。ともに、つなぎの砂を多く含んでいる。粘土層出土。

高環形土器（第27図 8）

脚部のみ 1 点。短い脚部は、ずんぐりとして八の開く形で、ヘラ、指などの調整痕が認められる。砂がやや多く、灰褐色を呈する。第 2 粘土層出土。

6 口 G 出土土器

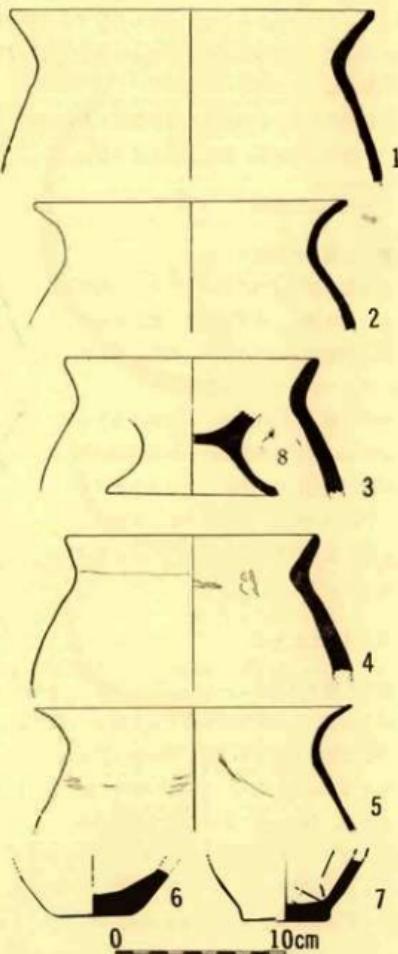
菱形土器（第28図 1）

口縁部を欠いて、胴部のみ。中位にある胴部最大径は、16.1 cm、口頭部内外面に指圧及び胴部内外面にはヘラによる整形痕がみられる。頸部・肩部に接合痕が認められる。砂が多量に含まれ、焼成は良好である。

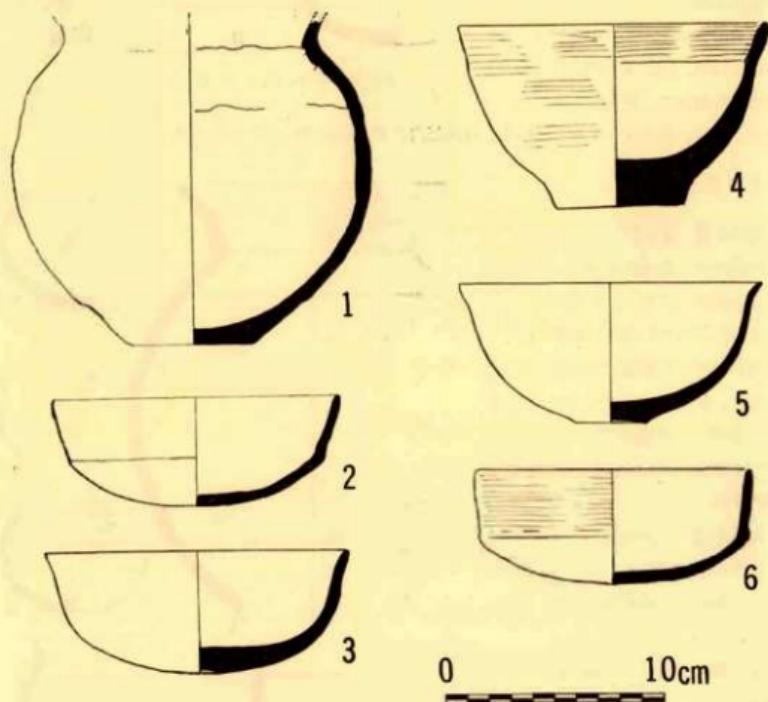
環形土器（第28図 2・3・6）

6 は口径 12.6 cm で直立する口縁が、2 は口径 13 cm で外反する口縁が、はっきりした後の上に付されている。3 は縫合がはっきりしない。整形痕は、器面が荒れていて判明しないが、口縁部は横なので、胴底部は、ヘラ削りであろう。すべて、第 1 黒色土出土。

盤形土器（第28図 4・5）



第27図 6 口 G 出土土器の 2



第 28 図 6 ハ G 出 土 土 器

4は鉢形とすべきであろうか。平底で、厚い器内で口縁部内外面横なでが施こされ、内面に縦が残る。胸外面はヘラ整形。5はくぼんだ平底で、薄手の器壁につらなって、口縁端がわずかに外反し、内面に稜状のものができている。4は第2黒色土、5は第1黒色土出土。

8 ハ G 出 土 土 器

菱形土器（第29図2）

口縁部の破片であるが、長脇の甕であろう。口径15.4cmで小さい。内外面横なで、細砂をつなぎとして、焼きがよく、黄褐色を呈する。第1黒色土層出土。

9 イ G 出土土器

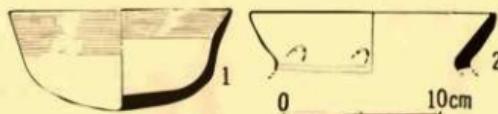
盤形土器

(第29図 1・図版11の2)

口径14cm、高さ6.7cm、口

縁部内外横なで、胴外面ヘテ

削り。内面に稜がはっきりしている。口縁部内外胴内面には紅彩の残跡が看取される。



第29図 8 ハ G, 9 イ G 出土土器

9 ロ G 出土土器

壺形土器（第30図1）

口径21cm、推定高約37cm、

重心が胴中央にあり、頸部が
大きくくびれて、複合口縁部
につらなる。口縁部内外面は
横なで、胴部は、ひどく荒れ
ているが、研磨されていたら
しい。器壁は厚い。大きい砂
疊を含む。

壺形土器（第31図14）

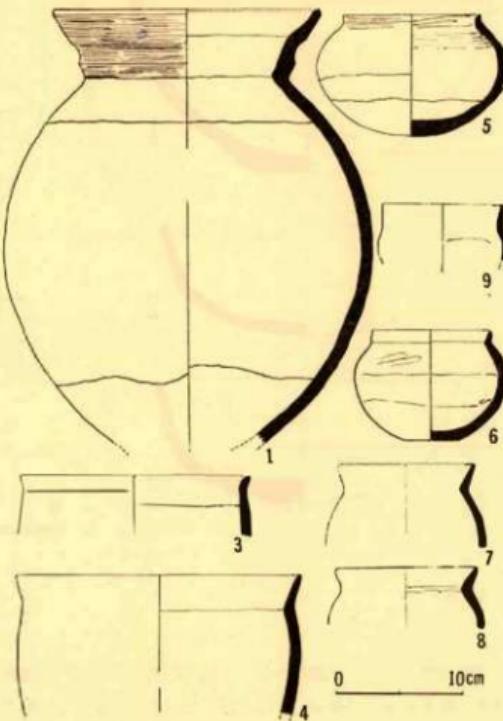
破片にすぎないが、内湾ぎ
みの口縁部と、球形胴の器形
であろうか。整形技法不明、
胎土、焼成とも良好、褐色を
呈する。

壺形土器（第31図4）

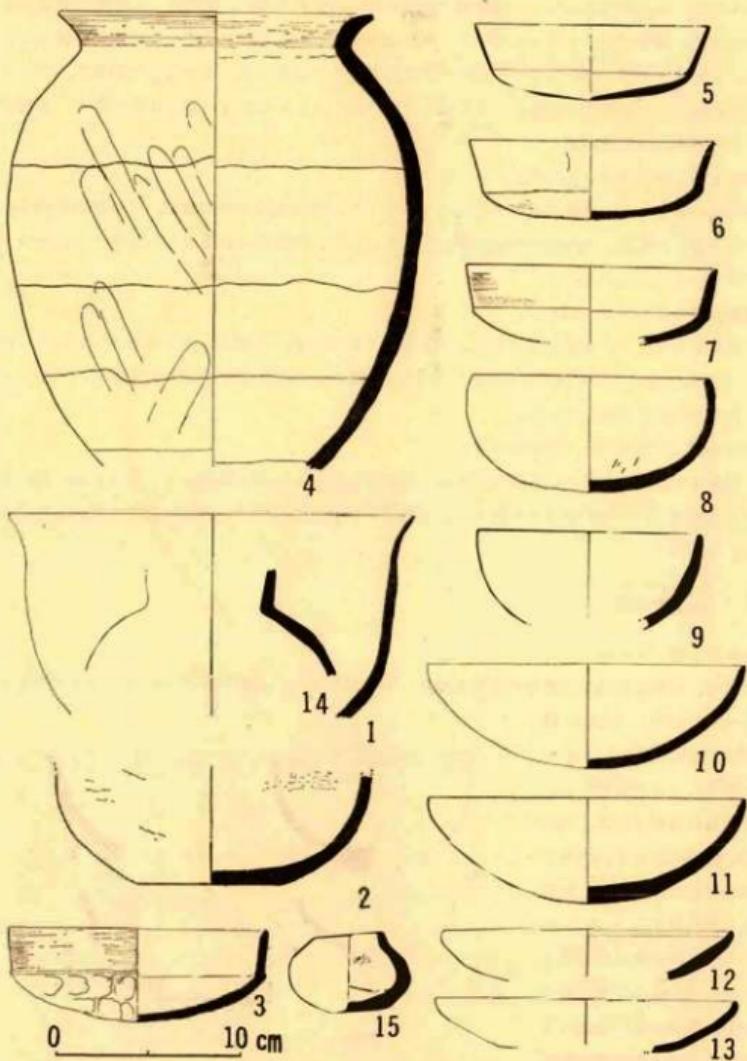
口径17cm、推定高28cm前
後、口縁部は短く外反し、重
心がやや高い、長胴の姿であ
る。巻き上げ手法によるらし
い接合痕が認められ、胎土に
は砂が多く、土もあまりよく
ないが、焼成良好、全体として粗雑な造りである。

壺形土器（第30図3・4）

破片のため、器形全体をうかがえないが、コシキと思われる。3はわずかに外に開く口縁部付近
に接合痕が認められ、4は推定口径22.5cm、内面の稜は、はっきりしない。大型のコシキらしい。
胎土は、精選されているが、しまりに欠けているのは、二次火を受けているためであろうか。黄褐



第30図 9 ロ G 出土土器の 1



第31図 9・G出土土器の2

色の地に、赤褐色がある。

盤形土器（第30図5～9）

5・6は、短頸壺であるうか。偏球形の胴部に短い口縁が付され、底部は、小さな平底である。造作は荒く、接合痕がはっきりしている。胴部はヘラ削りの上をヘラ研磨し、口縁部を横なでしている。7・8・9は、おそらくやや深めの胴底部が付くのである。やや張った肩部に、外に開く口縁部が付され、頸部内面に棱が、とくに7は明瞭につく。いづれも、胎土に砂が多く、黄褐色を呈する。第1黒色土層出土。

壺形土器（第31図3・5～7）

明瞭な棱をもって、口縁の直立するもの（3・7）、棱はあるが突出せず、口縁部の外開するもの（5・6）がある。口縁部内外面を横なでしているが、胴底部はおそらくヘラ削りし、その上を研磨しているのである。

壺形土器（第31図8～13）

半球形を呈するが、3類に分けらる。8・9の小形で深底のものと、大形半球形のもの（10・11）、浅底のもの（12・13）とがある。ただ、浅底のものは本遺跡では類例が少く、12・13には、内外面に紅彩を施している。

手捏土器（第31図15）（図版12の4）

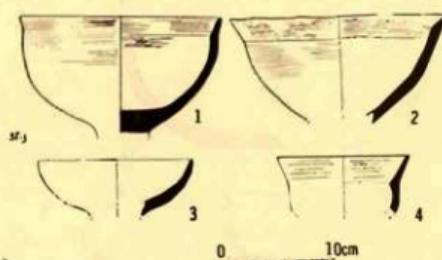
口径3.4cm、高さ4.2cmの粗雑な作りの土器である。粘土円板を底部とし、これに粘土糰を巻き上げて胴部とし、その外面をヘラ削りし、口縁部を横なでしている。外面に紅彩の残片が付着している。

9ハG出土土器

高環形土器（第32図1～3）

すべて、壺部に相当する部分のみであるが、その形態より、2類に分けられる。台付壺形土器といべきもので、1は口径

17.7cm、2は19.5cm、一度く
びれぎみになつた頸部から、
外反する口縁部が付き、内面
に弱い棱を造りだす。内外面
に横なで痕が認められ、紅彩
を施した痕跡がみとめられ
る。1はきめの細かい精選さ
れた上に細砂をつなぎに加え
ている。他の1類は3にみる
半球形の壺形土器に脚台部を



第32図 9ハ・ニ G 出 土 土 器

付した形態と判断される。推定口径13.6cm。黄褐色を呈する胎土は、精選された土に細砂を加えた良質のものであるが焼成は良くない。

9ニG出土土器

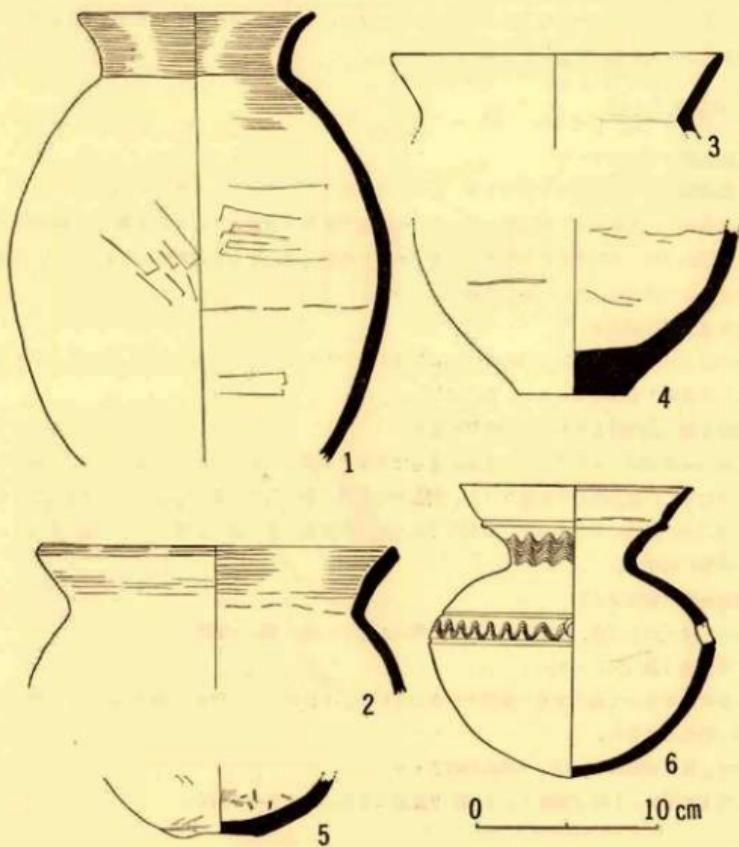
壺形土器（第32図4）

口径11.6cm、頸部が若干くびれて、口縁が外方に開き、内に稜をはっきり形成している。褐色を呈し、焼きしまりも悪くない。横なで痕が認められる。

10イG出土土器

壺形土器（第33図1～4）

口径には、大小二種がある。1は口径13cmと小さく、輪積みの長胴に、よくくびれた頸部から外



第33図 10イG出土土器

反する口縁部がつづく。胴部内面は、横位のヘラなで、脚上半部外面は斜位のヘラ削り、口縁部両面は横なで、2は口径20cm、3は18.5cmと大きく、外反する口縁部は、内外面を横なでし、2は胴部ヘラ削りの跡がみられる。2はよく焼きしまっているが、3は焼成不良。砂を多く含んでいる。3にはススの付着が認められる。4は底部のみであるが、他の變形土器とともに鳥帽子形の長ガメであろう。内外面にススが多く付着し、砂を多量に含む胎土は、黄褐色を呈して、焼成もよい。

盤形土器（第33図5）

底部のみであるが、小形の短頸壺らしい。一応盤形土器としておく。器壁は厚手である。

鷹形土器（第33図6）（図版12の1）

口頭部の大きく、長くない須恵器の趣である。胴下半部、胴上半部、口頭部の3段造り。口縁部の下部に鋭い棱を有し、頸部と二条の沈線に区画された胴中位に、それぞれ梯目彫きの波状文を配している。黄褐色の器面は肌荒れが目立つが、本遺跡の土師器の年代を押えるのに格好な資料の一つである。3とともに第5黒色土層上部から出土。

10口G出土土器

壺形土器（第34図1・2）

1は口径26.8cmの大形の土器である。胴がかなり張るようで、外面を荒くヘラ削りしている。口縁部は外反し、内外面とも横なでしている。頸・肩部に接合痕がある。2は長巻の口頭部破片で、推定口径23.5cm。外反ぎみの口縁部に、肩がわずかに張って、そのまま胴部に移るらしい。赤褐色に焼き上った胎土は、大粒の砂を含む。

壺形土器（第34図3）

胴部最大径16.3cm、器高15.5cm前後の口唇部を欠いた小形の壺形土器である。胎土は、砂と精選された良質の土を用いているが、焼成は甘い。

壺形土器（第34図4・5）（図版11の5）

4は口径18.5cm、高さ17.2cm、丸味をもってすぼまる底部には、ヘラで、単孔を穿つ。胴部内面をヘラなで、口縁部外面を横なでし、胴部外面をヘラ削りしている。頸部に弱い棱をもつ。2は口径15.5cm、口縁の反りがない。砂を多く含んで、焼成良好の土器で赤褐色を呈する。とともに、小形の部類に属する。

鉢形土器（第34図6）

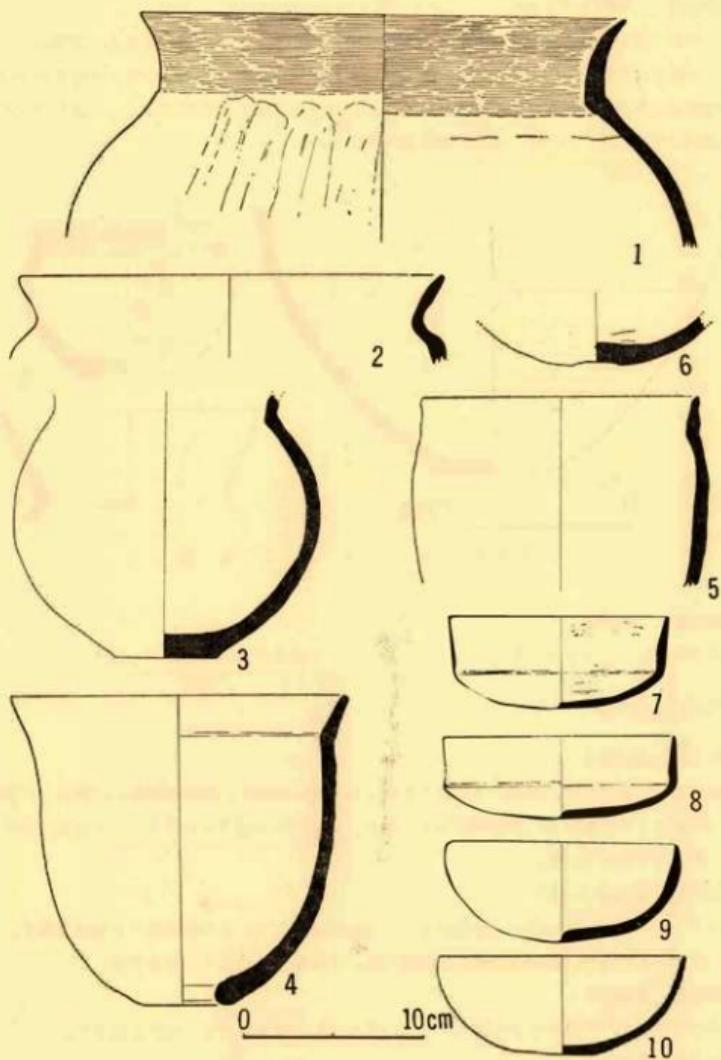
中央の窪んだ上げ底、赤褐色を呈する。焼成が悪い。搅乱層より出土。

壺形土器（第34図7・8）

外面に棱をもって直立する口縁部が付されている。7にはススの付着が認められ、8は砂以外に雲母を胎土中に含む。

壺形土器（第34図9・10）（図版10の2・4）

半球形を呈し、9は口唇部が若干内反り気味である。10は器壁が薄い。

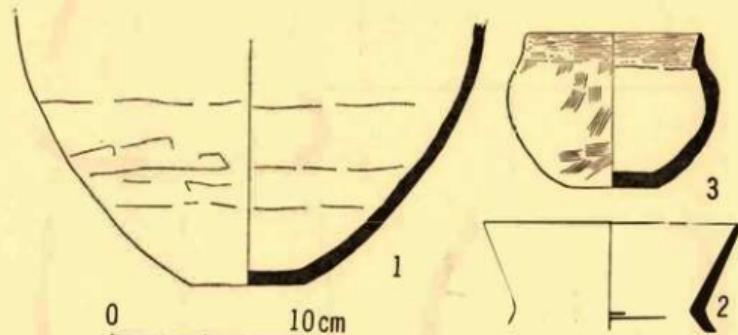


第 34 圖 10 = G 出 土 土 器

10ハG出土土器

變形土器（第35図1・2）

1は長胴の變形土器の底部と思われる。器壁は薄いが作りが荒く、接合痕をよく看取ることができる。外面は、底部近くで横に、胴中央付近では斜めにヘラ削りを加えている。2は口径13.5cmの小形の變形土器の口頸部破片。口縁部は、直線的に斜上方に開き、頸部でつよくくびれて、ゆるやかに胴部に移行する。内面に一応弱い棱が認められる。



第35図 10 ハ G 出 土 土 器

變形土器（第35図3）

口径9.5cm、高さ8.2cm。胴部にハケ目痕を残し、口縁部内外面は横なでを施す。

10ニG出土土器

變形土器（第36図1）

口径18.5cm、高さ32cm、全体の大きさに比較して小さな底部が、球形の胴部に付され、口縁部は一度ほぼ直立して外反する。胴部内面はヘラなで、外面はヘラ磨きをかけるが、不出来。口縁部内外は、横なでを加えている。

變形土器（第36図2・3）

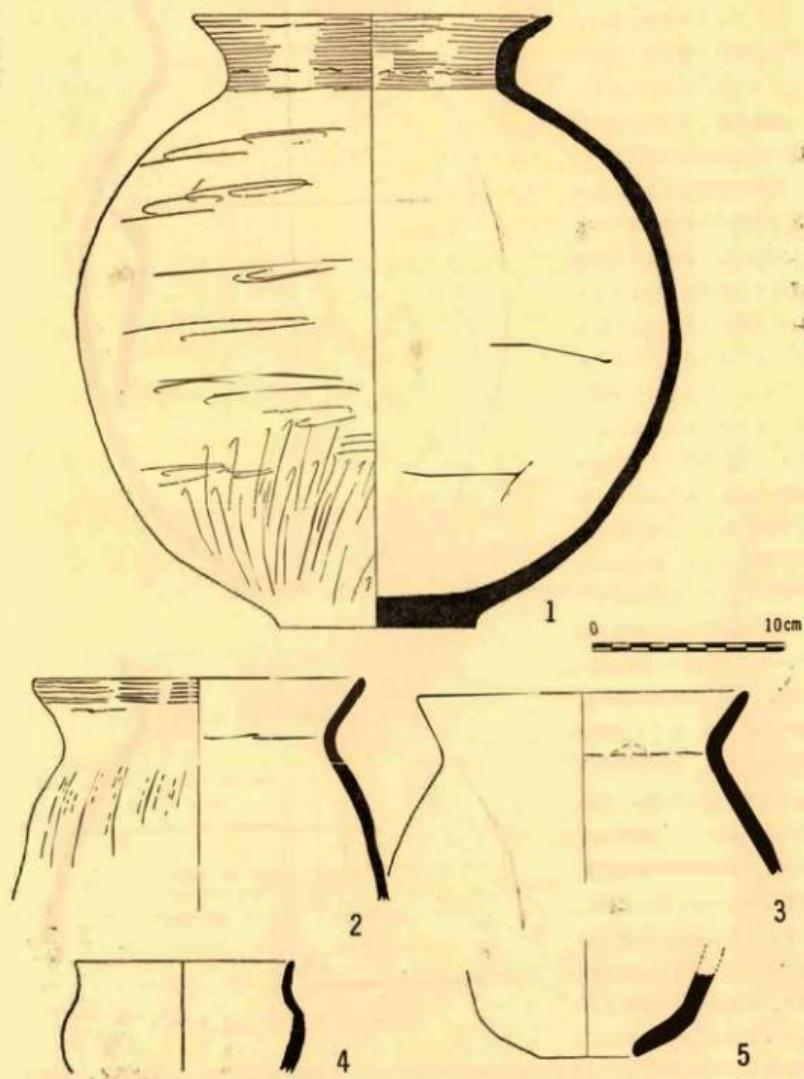
2・3とも口径17.3cmの長胴の變形土器で、口縁部は横なで。2の胴部はヘラ削りを施す。3は雲母、砂を含む胎土で、灰褐色を呈し、焼成不良。2は褐色の胎土中に砂を含む。

變形土器（第36図5）

すぼまる底部にヘラで一孔を削穿した小形の瓶の破片。焼成普通で、褐色を呈する。

盤形土器（第36図4）

口径11.3cm。底部を欠く。胴部が少し張って、頸部でゆるくくびれ、直立ぎみの外反する口縁につらなる。



第 36 図 10 = G 出 土 器

11イ G出土土器 (第37図)

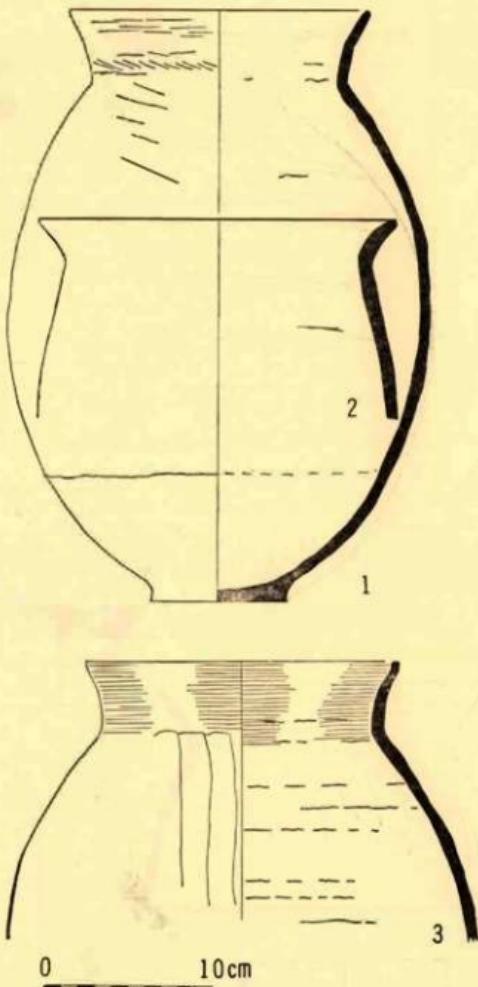
1・2・3の變形土器はい、
ずれも第2次調査第1号住居
址より出土したものである。

變形土器 (第37図1~3第38
図1~7第39図1) (図版12の5)

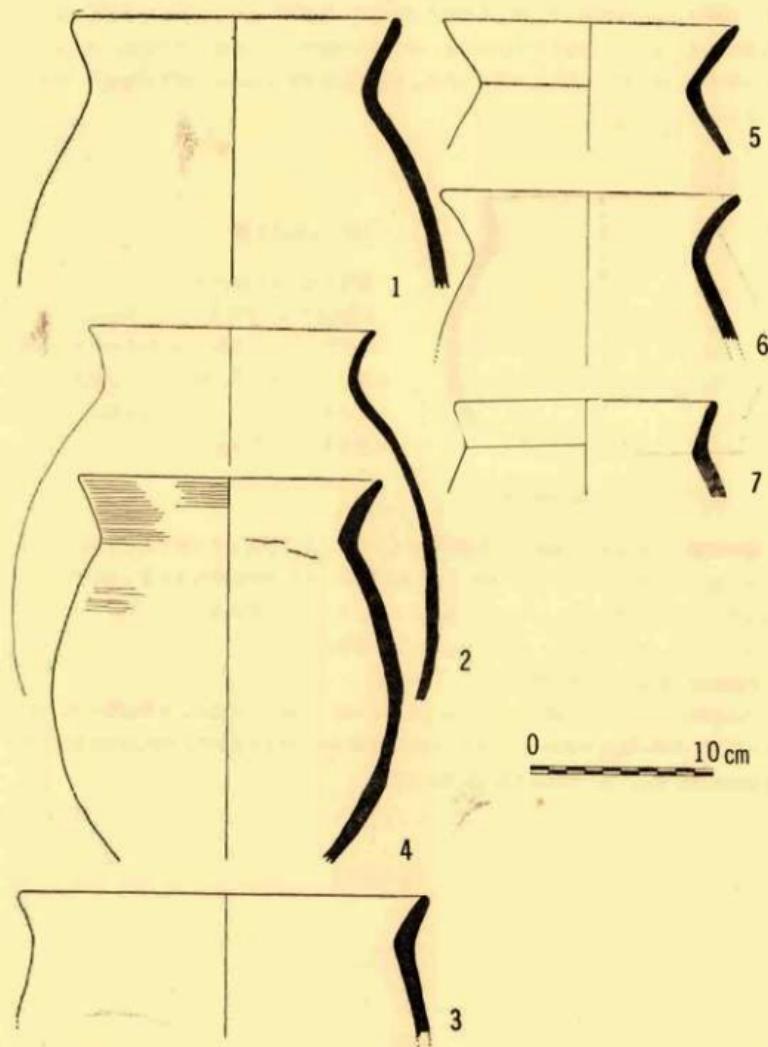
第37図第38図の長胴のもの
と、第39図の胴の張るものと
に大別され、前者はさらに第
37図2や第38図3のような大
口径で肩の張りの弱いもの
と、その他の中ぶくらみのもの
とに分けることができる。

2は2号住居址床面上から
出土した土器で、口径21.2cm。
胴部はあまりふくらまないも
のと思われる。口縁部横なで、
胴部はヘラ削り。胎土に砂粒
と雲母を混ぜ、焼成堅緻で、
明褐色を呈する。第38図3は
22.4cm、口縁部はやや外に開く。
磨耗がひどい。胎土は砂粒を
混え、焼成は、概して良好で
褐色を呈する。第37図1は口
径18.3cm、高さ34.9cm。頸部
で一度立上って、口縁部が外
に開く。接合痕が頸部と胴下
部に認められる。胎土に砂石
を含み、焼成堅緻で灰褐色を
呈する。第37図3は口径19cm。

巻き上げ手法がよく看取され
る。口縁部貴なで、頸部以下
ヘラ削り。精選された土に大粒の砂を多量に含む胎土は、黄赤褐色を呈する。焼きは悪く、しまり
が悪い。第38図1は第37図1に全く同じ。第38図2は口径15.6cm、胴部最大径23.5cm。砂粒を多量に
含むが、焼成は概して良く堅緻で、灰褐色。胴下位に黒斑を有する。第38図4は口径16.6cm胴部最

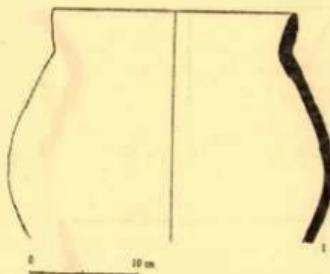


第37図 11イ G 出土土器の1



第38圖 11イG出土土器の2

大径19.4cm。頭部から口縁部にかけてやや「く」の字状に開き、胎土に小石を混える。口辺部横などで、胴部ヘラ整形。焼成良好、黄褐色。第38図5は口径16.1cm、7は14.2cmでともに第38図4と同じ。これらはあまり高くない長胴形の壺であろう。第39図は口径22.3cm、胴部最大径30cmで、口縁部はやや垂直に立上り、頭部を肥厚させ、器壁内面に接合痕が認められる。胎土は小砂利粒を混じえ、焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。



12イ G出土土器

變形土器（第41図の2）

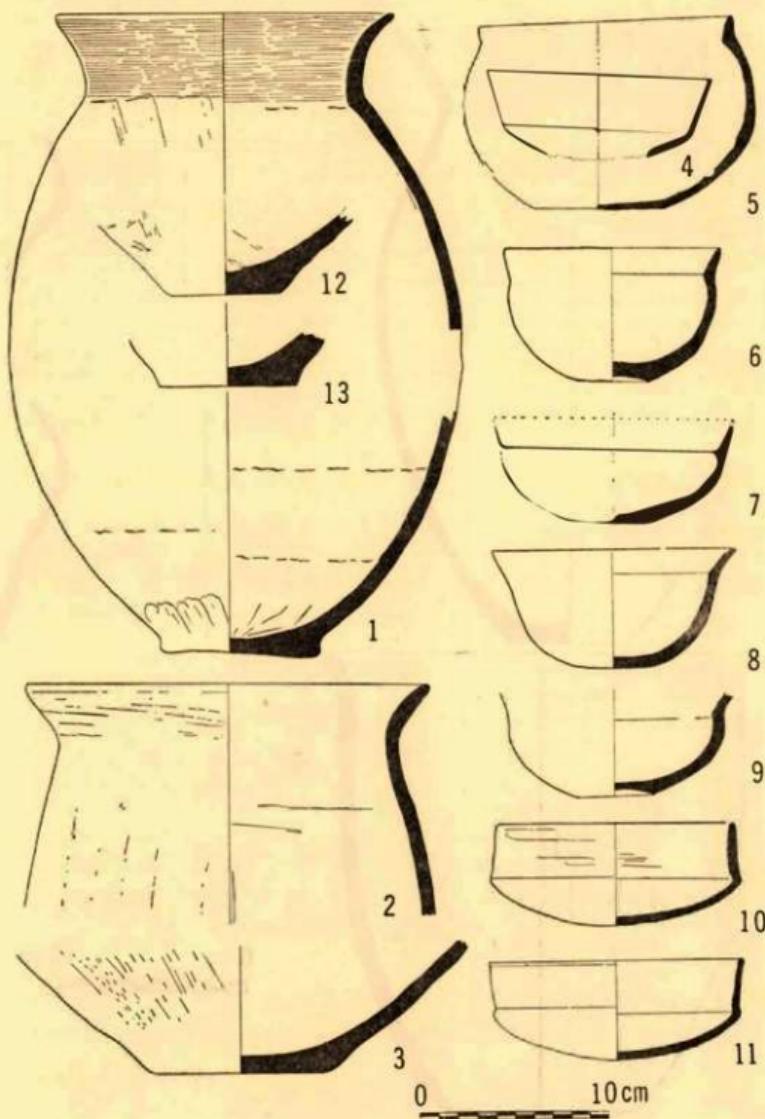
口径15.3cm、胴部を欠く。肩にふくらみをもつ。口唇部外側、頭部内面に稜線を有する。軽耗が著しく。整形不明。胎土は砂粒の混入が多く、表面がザラザラしている。焼成は普通で、灰褐色を呈する。表土層出土。

第39図 11イ G出土土器の3

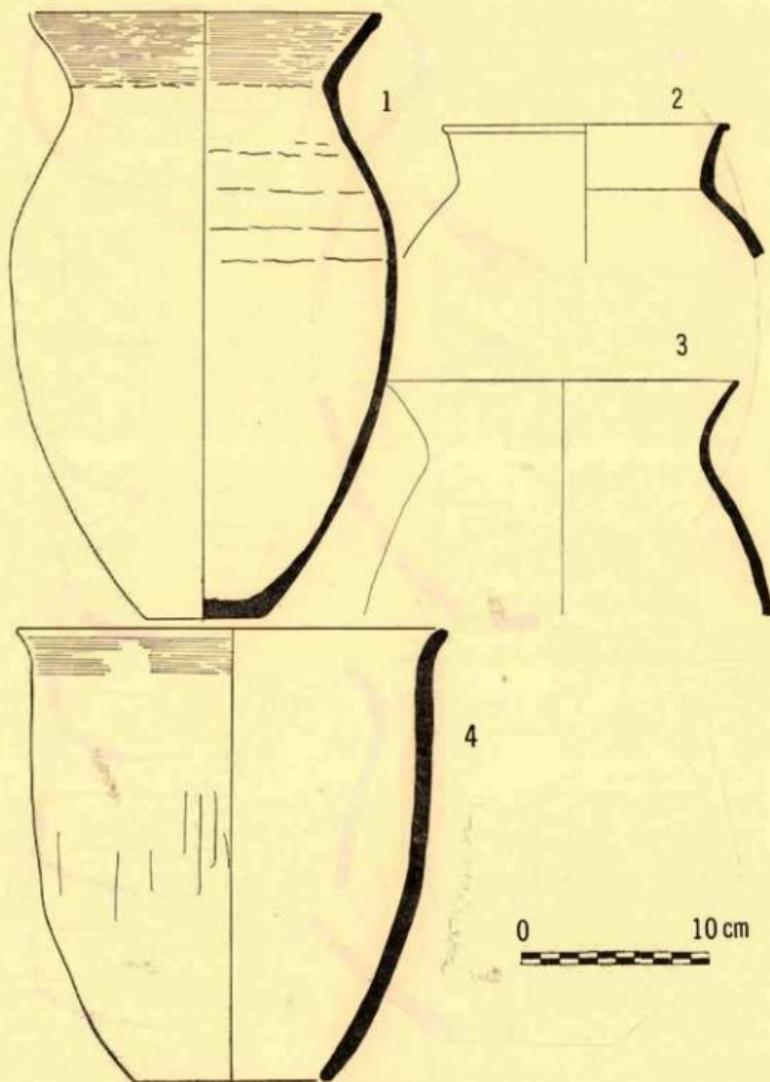
盤形土器（第40図5） 短頭の小形盤形土器もしくは、鉢形土器とすべきであろうか。いわゆる盤形土器とは形態を異にする。口径13.4cm、高さ10cm、平底で胴部は丸みをもっている。短かく直立する口縁部は横なでが、胴部から底部にかけてヘラによる調整がみとめられる。胎土には砂粒が混して多く、焼成は良好で、褐色を呈する。第6黑色土層出土。

環形土器（第40図4・10・11）

口縁部が直立するもの（10）、外開するもの（4・11）の違いはあるが、口縁部横なで、胴底部ヘラ削り、腰部の稜など規を一つにする。10は口径12.4cm、高さ5.5cmで、内外面に紅彩を施す。4は第6黑色土層、10・11は第2黑色土層より出土。



第 40 図 12 イ・ロ G 出土土器の 1



第41図 12イ・ロG出土土器の2

12口 G出土土器

變形土器（第40図1～3・12・13、41図1・3、42図）（図版12の6）

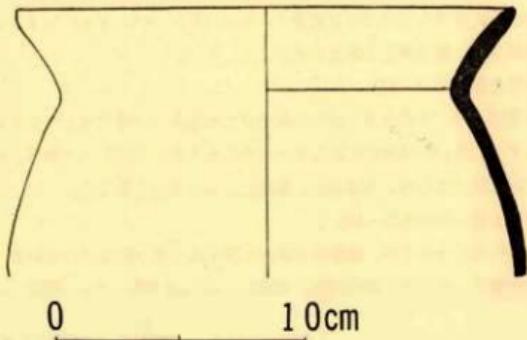
第40図1は口径17.8cm、高さ34cm、胴部最大径は中央部にあり24.1cmを有する。直立ぎみの口縁部は、肩のなだらかな長円形の胴部に付される。口頸部横なので、胴底部はヘラ削り、器壁外面は凸凹が少ない。底部近くに二条の接合痕がみられる。胎土は砂が多く、焼成良好で黄褐色を呈する。胴部外面に炭化した有機質分が付着している。第3黒色土出土。第41図1は口径18.9cm、高さ32.7cm、胴部上位に最大径がある20.8cm、口頸部横なので、胴部外面へラ削り。肩部内面に接合痕を認める。胎土は緻して良好で、褐色を呈し、外面に有機質炭化物が付着している。第3黒色土出土。第42図は口径19.7cm、口縁部外反、口頸部内外に整形の指圧痕がみられ胴部はヘラ整形。胎土は荒い砂粒を混じえ、焼成良好、灰褐色を呈する。有機質炭化物が器外面に付着。第3黒色土層より出土。第41図3は口径18.9cm、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。頸部指圧痕、胴部へラ整形、胎土中には、多量の荒い砂粒及び石英を含む。焼成普通で灰褐色。第3黒色土層より出土。第42図、第41図3の口径が、第40図、第41図1より大きかったのに、さらに大きいのが第40図2である。第40図2は口径20.9cm、口縁部はゆるやかに外反して開き、横なので、胴部外面へラ整形。胎土は多量の荒い砂粒及び石英を含む。焼成普通。灰褐色、4号造構床面より出土。第40図12・13は底部破片。第40図12は（4号造構）の床面直上から出土。

變形土器（第41図4）

口径22.5cm、高さ24.4cm、底径10.3cm、全体に器壁が厚く、特に口縁部は丁寧な横なので、胴部はヘラ整形。内面に接合痕をみとめる。

變形土器（第40図6～9）（図版11の1）

6は口径11.2cm、底部外面はヘラでえぐられて上げ底。頸部は弱くくびれて口



第42図 12イ、ロ、G出土土器の3

縁部が外上方に開き、内は明らかな稜が形成される。胎土は精選された土で、焼成不良。灰褐色を呈する。内外面に紅彩が施されている。第3黒色土層出土。9も上げ底である。胎土精選、焼きが甘く、黄褐色を呈する。第7・8は平底で胴底部外面をヘラ調整している。7は内外両面に稜を残すが、8の腰部はくびれが弱く稜が認められない。两者と、胎土、焼成、色調は9と同じで第2黒色土層より出土。

13イG出土土器

變形土器（第43図1～3、第44図1～7、第45図）（図版12の5）

第43図1は口径20cm、高さ34cm、胴部最大径は胴中位のやや下にあって22.4cm。口縁部は外反し、口唇部外面に稜をもつ。頸部、胴部に三条の接合痕が認められる。口縁部横なで、胴部へラ整形。胎土はやや砂を混じえるが良好で焼成もよく、堅歛で灰褐色を呈する。第5号遺構床面第2黒色土出土。第43図3は第43図1と同様の長胴の變形土器。口縁部を欠くが、胴部最大径が、上の方にあって、やや肩が張る。内外面ともヘラ整形。焼成、胎土良好。灰褐色、5号遺構第2黒色土出土。第44図1・2は口径17.2cm、口縁部は外反して開き、胴部の長円形状にふくらむものであろう。胴部へラ整形。胎土に砂粒が多く、器面がザラザラしている。焼成はあまり良くなず赤褐色を呈し、胴部に炭化した有機質分が付着している。5号遺構第2黒色土層出土。第44図4～6は以上にくらべ、若干口径が小さい。おそらく長胴を呈する變形土器の口縁部である。第44図4は第4黒色土層中、第44図4、6は第2黒色土層中、第44図5は第5号遺構内第2黒色土層中出土。以上に比較して口径23cmと大きい第43図3は第44図2を底部にもつであろうか。胎土、焼成、色調に類似性が認められ、近くより出土している。胎土良好で、焼成は粗雑で黒灰色を呈する。第45図は口径19.3cm、肩が張り、口縁部の直線的に外開する厚手の土器である。頸部に指圧痕と接合痕とがみられる。砂粒を含む胎土はあまり良好ではない。焼成は普通で、褐色を呈する。第3黒色土層出土。

塊形土器（第44図8・9）

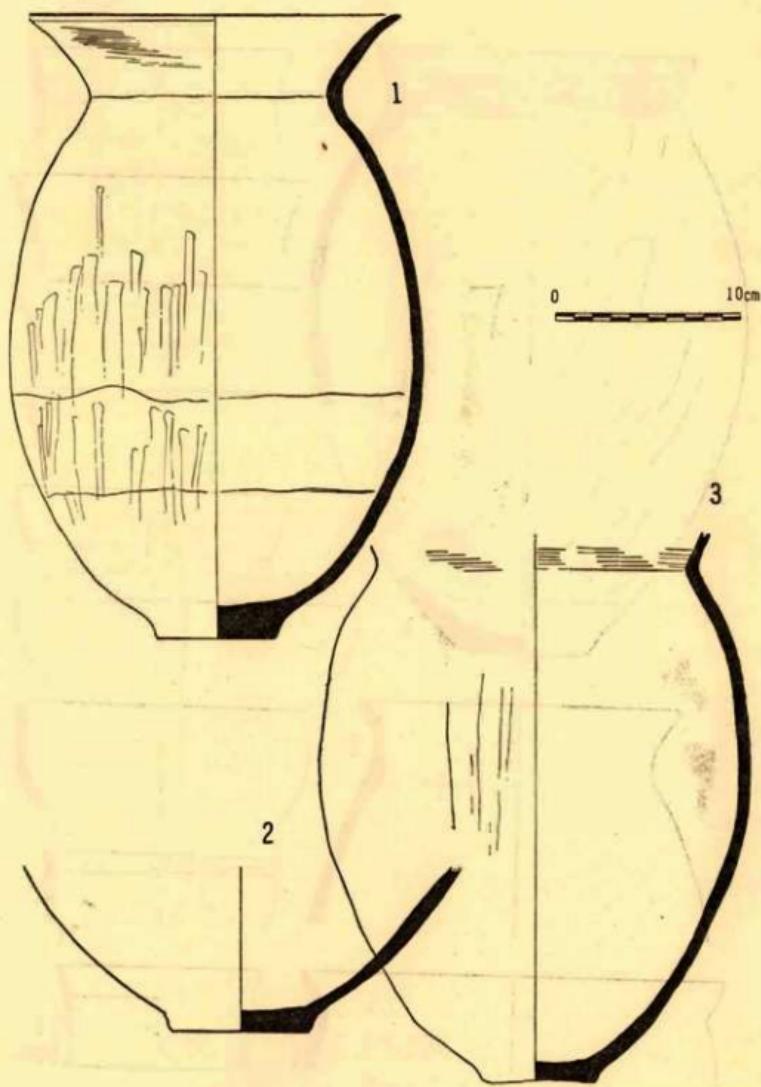
8・9は薄手の内湾する口縁破片であるが丸底がついていて、半球形の塊形破片になるものと思われる。9は口径18.1cmと大きく、8は口径14.6cm。ともに清選された胎土で焼成もよく赤褐色を呈する。第2黒色土層より出土。

壺形土器（第44図10）

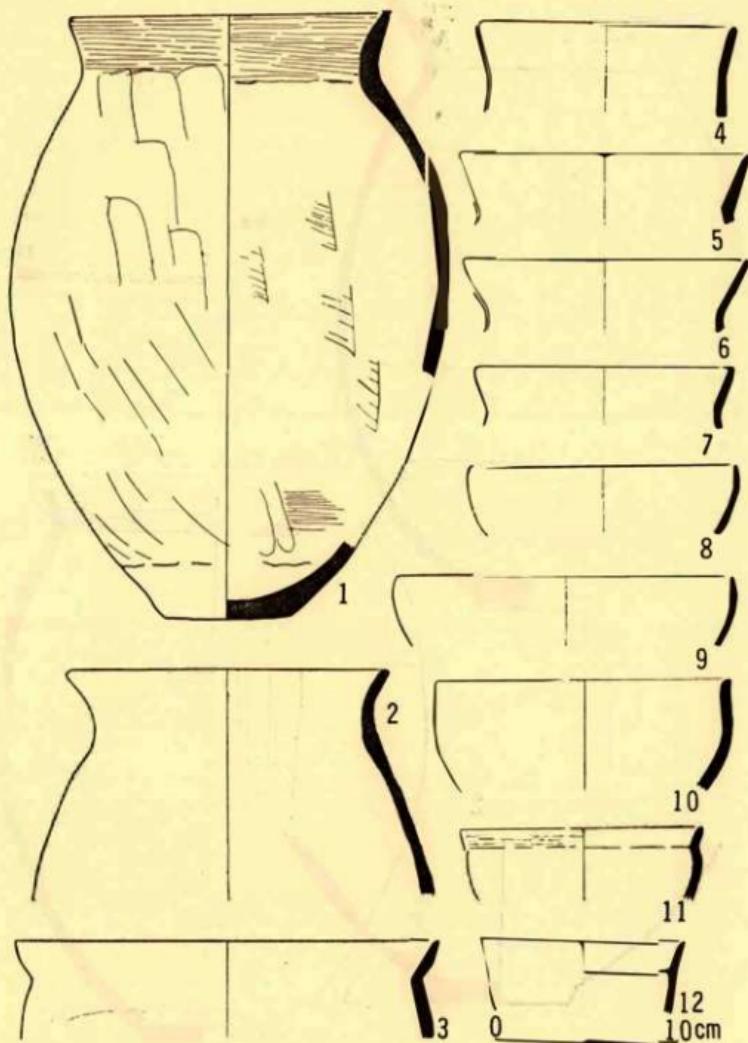
口径15.7cm、底部を欠くが丸みをおびた胴部からやや内傾して口縁部が直立する。稜ははっきりしない。あるいは鉢形土器とすべきであろうか。外面にヘラ整形。胎土はやや砂粒を含むが、精選された粘土である。焼成良好、黄褐色。第4黒色土層出土。

盤形土器（第44図11・12）

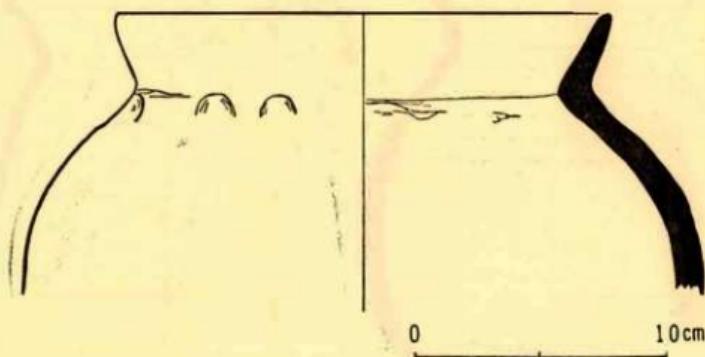
ともに底部を欠くが、頭部がくびれて稜がはっきり形成されている。口縁部は外反して開く。胎土は精選され良好で、焼成普通、赤褐色。11は口径12.9cm、12は口径11.1cm、第2黒色土層中出土。



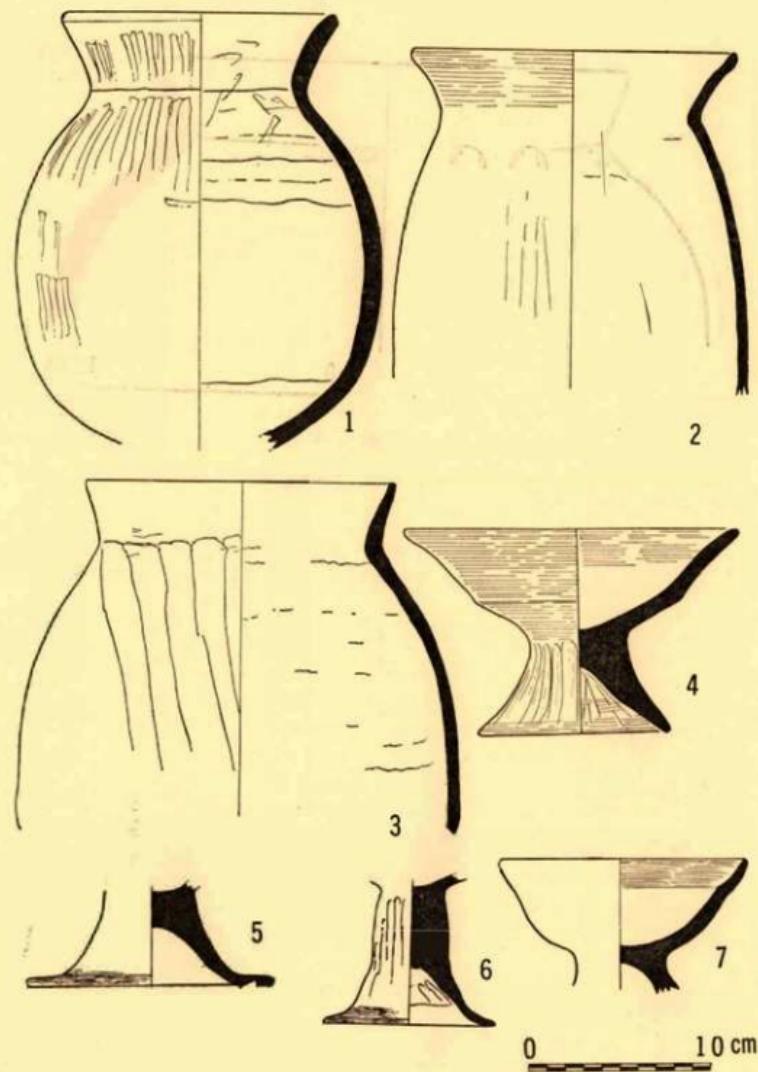
第 43 図 12 ハ G、13 イ G 出土土器の 1



第 44 図 12 ハ G、13 イ G 出土土器の 2



第45図 13イG出土土器の3



第 46 図 表面採集および既掘の土器の 1

表面探集および既掘の土器

壺形土器（第46図1～3）

1は口径15.2cm、推定高25cm、器高のあまりない小形の長胴の壺形土器、口縁部は横なで後、下から上に、胴部外面は上から下にヘラをかけて器壁を削取っている。重心の低い、厚手の土器で口縁内面に紅彩を施したらしい部分がある。外表全体にススが付着、砂を多量に含む胎土は、焼きしまりが悪い。明黄褐色。2はすんなりした胴部は、頸部でゆるくすぼんで、斜上方に開く口縁部に統く。口径18cm。口縁部横なで。胴部は上から下にヘラ削り。暗灰褐色。部分的に赤紫斑があり、二次火熱を受けている。大粒の砂を多量に入れた胎土。焼成はあまり。3は口径17cm。口縁部はあるまり開かず、胴の大きくふくらむ長壺。口縁部横なで。胴部外面を頸部から下へ、ヘラがけして削り込む。入急で、粘土組積上げによって生ずる器壁の凹凸もほとんど認められないが、胴部内面の接合目をなできらげし、痕跡をとどめている。胎土は砂が多い、焼きも悪くない。

高环形土器（第46図4～7）（図版11の7・8）

4は口径18.5cm、高さ11cm、弱い稜をもつ環部は口縁が外反し、底部がくぼむ。脚部の裾は外反して短い。外面紅彩。脚部外面ヘラ削り、内面はヘラなしで、脚裾の内外を横なで、砂の少ない胎土は精選されており、黄褐色を呈する。7は口径14cm、豊富の環部は口縁部横なで、脚部は大きく外開するらしい。環部内面紅彩。黄灰色の胎土は、焼きしまりが悪くない。6は外開する脚部は、裾に至って平らに広がり、横なで痕を有する。紅彩あり。環部底面にも紅彩。細砂を混じえた胎土は、精選されているが、焼成はかんばしくない。5は残高5.3cm、外面ヘラ削り、裾部横なで。細砂を含む紅褐色の胎土は、きめが粗い。焼成不良。

碗形土器（第47図1）（図版10の5）

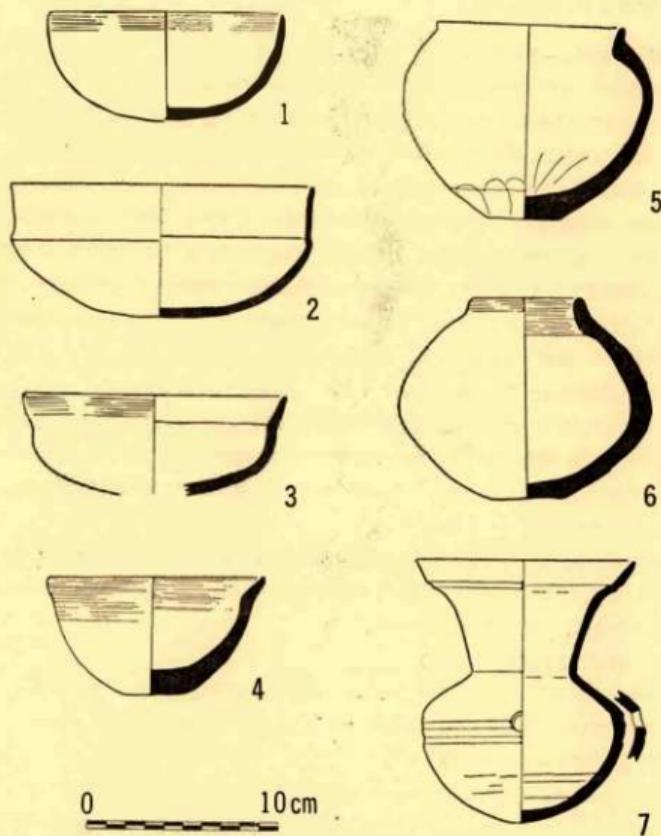
口径12.5cm、高さ5.7cm、口唇部が若干内溝する半球形の碗形土器、横にヘラをかけて、小さな平底を削り出している。内外面紅彩。砂の少ない胎土は、精選されたものである。

盤形土器（第47図3～6）（図版11の3）

第47図3は口径14cm、高さ5.4cm、内溝する胴底部に外上方に開く口縁部を付し、稜を形成する。内面は全面に、外面は口縁部に横なでの痕跡を認める。内外両面にススが付着。第47図4は口径11.5cm、高さ6cm、内面に稜をもち、口径の割に深く、平底である。砂の少ない胎土は精選されたものであるが、気泡が発生している。明るい黄灰色。焼成ややよい。第47図5・6は短頸壺の類であろうか。第47図5は口径約10cm、高さ10.4cm、肩の張った重心が上による土器。口縁部横なで、胴下部ヘラ削り、底部を中凹みにヘラ削り込み、胴部内面ヘラなし。第47図6は口径5.8cm、高さ10.5cm、短い口縁部は径も小さく、胴の張る器壁の厚いズシリした土器。胴下半部に、胴上半部と口縁部をつぎたして二段階の成形。細砂を多く混ぜた胎土は、灰色で、焼きしまりはよくない。

疊形須恵器（第47図7）（図版12の2）

口径11.6cm、高さ13.9cm、肩の張った胴部に直線的に開く頸部が多屈して、径の大きい口縁部に連なる。口縁下端部に、一条の沈線をめぐらして、稜を造り出し、胴部には、ロクロ目が残る。胴下半、底部は、粘土紐を巻き上げ、畳形を造って、ロクロを利用して成形し、その後に、胴上半部以



第 47 図 表面採集および底掘の土器の 2

上を付け足している。底部をヘラで削って丸くし、胴部に一孔を穿って仕上げたものらしい。自然
釉がかかった部分がある。（小泉 功・笠野 錠）

2 出土土器に関する若干の問題

以上述したところの本遺跡出土の土器は、鬼高式土師器の典型といふことができる。六世紀か
ら七世紀にかけて使用されたものである。

既述の通り、本遺跡は沖積地に形成された自然堤防状の微高地に立地した集落址であつて、それゆ
え、遺構の確認が技術的に困難をきわめ、同時に排棄された一括出土品として把握しうるものは決

して数多くない。層位的に出土品を分別するには今後に残された問題点もあって即座に解決しえない現状といえる。したがって若干のものを除いて、多くは、その型式から、土器の位置づけを行なわねばならぬであろう。ところが、そうするに際しても長時間粘質土中にあった土器は、しまりが弱くなつて水洗の過程で胎土が溶けだし、観察に耐えうるものは極く限られてしまうのである。こうした困難にもかかわらず、出土土器を全体的にみると、そのすべてが南関東でいわれる鬼高式土器の範疇に含まれるものであることはほぼ誤りのないところであろう。須恵器の總2点も、これと同時に使用されていたとみてよいように思われる。

壺形土器、斐形土器、瓶形土器、鉢形土器、高坏形土器、杯形土器、壺形土器、壺形土器よりなる出土土器は、量的にみて壺形土器と杯形土器がほとんどを占める。同時期の他遺跡でも認められるこの傾向は、壺形、瓶形、鉢形、壺形、高坏形土器の少なさ、すなわち、前代の和泉期との比較でいえば、これらの土器が意味を失いつつあったということでもある。なるほど瓶形や鉢形は、和泉期における出土例は発掘された住居址数に比して少ないのであるから、特記するに値しないのかとも知れないが、同様の比較を後代の真間、国分期に及ぼして考えるならば、これらの時期の住居址軒数に対する瓶形土器の出土率というものは、和泉期に劣るのではないか。高坏瓶形土器の盛行は、和泉ないし鬼高期のはじめ頃にあり、鬼高期の終りから真間期に衰退してしまうように思われるるのであるが、こうした観点から本遺跡出土土器をみると、ほぼ鬼高期の中頃に位置づけることができるようである。このことは、前代の名遣りとしての壺形土器が頸部が短くなり調整が粗雑であるところから見て、この期に相応しいものといえる。斐形土器も、典型的な長胴の鳥帽子形のものとともに、口頸部のタブレが少なく、ゆるやかな曲線を描いて立上るやや小型のものの存在など、こうした傾向の反映とみることができよう。

さて、こうして土師器を位置づけた際に奇異を感じさせるのは、2点の須恵器總の存在である。すなわち總のひとつは須恵器第二型式に属するものと思われるが、この事実は、須恵器第三型式と共に出したり、第三型式の須恵壺を模倣した土師壺をセット中に含む鬼高期中葉の単純な本遺跡から出土する事実と結論をきたすのである。この背反する二つの事実は、本遺跡の土師器を、須恵器第二型式に伴う鬼高期前葉の所産と理解するのではなく、一時期早く作られた總がその後も使用され続けて、結局排棄されたのが鬼高期中葉であったと判断すべきではなかろうか。その根拠の一つとして、他のもう一つの總は須恵器第三型式のやや古いものと推定されることが挙げられよう。須恵壺は縦起的に新しいものが採用されていったのに対して、總については新型式の登場上にもかかわらず旧来のものが使用されていたという興味ある事実は、土師總の中に須恵器のそれを模倣してまで代用していたという他遺跡で確認された事実を勘案すると、深い意味をもっているように推察される。

さて、本遺跡を鬼高期中葉頃、すなわち六世紀後葉から七世紀前葉頃に比定しうるとするならば、その立地を改めて考えなおすことも必要となってくるのではあるまいか。羅文晩期をはじめとして、しばしば沖積地に集落の占地がみられるのである。そして応神・仁徳陵に典型的に示される土木技術の高度化と『古事記』『日本書紀』の池溝開発の記事とから、五世紀初頭以降の大規模な冲積地の開拓を想定する見解が定説化しているのであるが、果してそれは正しいであろうか。『記』『紀』の池溝開発の記事に関する限り、そのほとんどは歴史的な事実の記述とは看做しえないのであっ

て、信憑性のあるのは、推古紀以降の記載であるらしい。その詳細は別に一考を要するが、池溝を設備しての大規模な開田は、確実な目安は七世紀初頭の推古朝であることは、本遺跡を考えるうえで無視しえないとこころとなるように思われる。要するに鬼高期には、台地の奥に集落が進出するとともに、新しく開田された耕種地の近くの微高地に集落が新たに進出していったと想定されるのである。（笠野 稔）

3 祭具、漁具、石器

6号Gより滑石製双孔円盤が単独出土している（第48図41）（図版13の1）。これは落ちくぼんだへこみに土器片がいくつかの山となって出土しているが、これと全く無関係に出土した。この双孔円盤は左右に小孔を持ち、長径29mm、短径27mm、厚さ5mmで円にきわめて近い椭円をなしている。裏側には小孔の左右に摩り減った紐ずれの痕跡があり、紐を通して使われたと推測される。

滑石製小玉は、12号Gで杯が折重って出土しているそばに散乱した状態で出土した（第16図48、図版8の2）（図版13の1）。小玉の一部は杯の下にもぐりこんでおり、また杯と杯の間にもあるが、大部分は杯が折重なっている所から、東側にソロバン玉が散乱している様に多数出土し、杯C-10のそばに集中している。散乱した状態でなんら原位置を残していない様であるが、杯C-10の近くに置かれたものと推定される。小玉は全部で56個出土した。各々の大きさは厚2~6mm、直径6~8mm、小孔2mmで穴は真っ直ぐにあいていると、ややななめにあけられたものがある（第48図40）。小玉は滑石製で灰色を呈し、全部同一の滑石で造られている。これら小玉の他に滑石製品が併出している。杯C-10の近くの1号滑石製品は表面はすべすべしており（第48図35）、裏面に擦痕が左右に走っている。小孔が1つある2号滑石製品は杯C-14にあり、表面によく擦痕が多い。表面にも左右に多数の擦痕がある。紐を通して、その時なにか別の物体とぶれて擦痕がついたとすると、擦痕の方向の不一致が説明できず無理のようで、製作中にできたものと思われる。小孔がひとつある（第48図37）。3号滑石製品は小孔があり、その左上部に擦痕がある。他の面はすべすべしており（第48図38）（図版13の1）、これら小玉と有孔滑石製品は別のものであると思う。この小玉、有孔滑石製品の分布状態を見ると、（第16図参照）杯などC-9、C-10、C-12、C-13、C-14、C-15と同時期にC-10の杯のそばに有孔滑石製品と小玉が一括して置かれたと見るべきである。

以上が遺物の記載であるが、この遺物について調査団全体の意見ではなく、筆者個人の見解であるが、双孔円盤については、この様な円形をなす遺物は、（第48図42）古代人の意識の中で強烈な役割をはたしている太陽を意味している場合が多い。この太陽に対する崇拜は世界各国の諸民族に見られる。この様な椭円や円で小孔が2つあるのは、モンゴルやシベリアのシャーマンの祭服に縫いつかれている。モンゴル領内トゥーワ自治共和国と国境を接した北部に住んでいるグルハート族では、シャーマンの祭服につける装飾品の中に太陽を示す銅製の小円盤があり、太陽の円盤であり、小孔があり、それを通して祭服に縫い付ける。報告によると『中央に2つの小孔があり、背中あてに円盤の小孔に紐を通して、背あての長方形のものを長衣に縫付けている』（文献A.P.141）。この装飾品の他に、半円状の銅製のメタルで、やはり小孔が2つあり、これは月を示している。子安貝、鈴、円形の環に紙をよったものを付けた様な鉄製の環がある。この小孔をもった太陽

の円盤が、シャーマンの背中の中央の背あての部分に付けられている。見田方のこの双孔円盤もやはりシャーマンの祭服に着装されたものと見るべきであろう。ただ紐に通すだけの祭具であったら2つの小孔があいていることを説明できない。その位置は分らないが祭服に縫付けられたもので、この小孔がすりへった跡があることは、この祭服を付けたシャーマンが両手をふり上げ、盛んに身体を動かし、その結果縫付けた所がすりへってきたのであり、シャーマンの激しい動作によるものと思う。

西シベリアの北部のガナサン族の天界の精靈をまじなうシャーマンの祭服に、楕円形でふちに小孔のある双孔椭円盤がある。これは『鉄で作られた月で、中央に長方形の穴をもち、この長方形の穴の歯は、月にやどっている人間のたくわえられた精靈を表し、子供が生まれるさいに地上に送られる』（文献B P 105）という。この地に悪靈である角をつきあう鉄製のオオシカ、悪靈を遠ざける鉄製の白鳥、畜車状で太陽と光の精靈、手形状のメタル（文献B P 105）、すみまるの長方形に近いメタルよりなる。ここでは楕円形の小円盤は月を象徴するに使われている。（第48図43）見田方遺跡の小円盤は太陽を示すのか、月を示すのか現在判るすべもないが、鏡が太陽を示す様に、すでに指摘されているように、この双孔円盤も恐らく太陽を示すものであろうし、また後に述べる半月形、半円の滑石製品が月を示すものと思う。当時のシャーマンがどの様な祭服を着ていたか、文献的にも、考古学的にも復元は現在不可能である。ただはっきりしていることは、シベリア、蒙古のシャーマンの様に鈴とか鉄製、銅製の各種の垂飾はつけていなかったことである。その代りに小孔のある滑石製模造品をシャーマンの祭服に縫付けていたのではないかと思う。シベリヤの様に深い意味を持った天界の神、悪靈を示すものであろう。あまりにも滑石模造品に実用品を模造したものが多いため、それを祭服に縫付けたとするには飛躍がある様に思われるが、双孔円盤のように、ただ紐に通すには2つの穴は不要であり、考えられることは祭服に縫付けたことであり、シャーマンの祭服に對称的につく太陽と月は双孔円盤と勾玉の模造品に対置されているのではないかという点からである。この様な模造品が一括出土するのは祭服をなんらかの原因で焼にかけ、大祭を行うからであり、その原因は各種のケースがあったと思う。見田方遺跡の場合は洪水による集落の水没と復興にあったと思う。

1号、2号、3号の滑石模造品は半円、半円状をなしているので月を示すもの様に思われる。これは孔に紐系をつけ、衣服に縫付けていたものであり、それはシャーマンの祭服に付けられたものであろう。なぜここに置いているかというのは非常に興味ある問題である。杯は上を向けて列をして出土しているところから見ると、杯の内部に何かを盛って、その様な杯を6ヶ置き、C-10の杯の片腹に小玉とシャーマンの衣服、それには有孔滑石製品が縫付けられていた。この時期は第二黒色土層で第1住居址、第3、4遺溝よりも後の時期であり、これら住居址や遺溝が埋没してから後に、この一帯に第二黒色土層が一面に形成されたときに置かれたものである。第1住居址を始め、この集落全体が一度大きな洪水で水没し、その水没の時、土器の出土状態から見ると日常用品や土器は、舟につんで逃げさっているらしい。その洪水によって堆積した粘土層の上に再びもあり、盛大な祭礼を行ったと思われる。これは年間の祭礼と全く違う大祭を行い、この時シャーマンが身から離すべきでない、月や太陽をかたどる滑石模造品を縫付けたシャーマンの祭服や呪術のこ

もった滑石製小玉を大地にそり立つ柱にかけ、杯に食糧を盛り、神にささげたものと思う。呪術をもつ小玉や滑石製品をつけた祭服をシャーマンが手離すことは、そのシャーマンが普通の共同体員に還元され、すでに呪術の道から遠ざかることを意味している。このシャーマンが重大な過失、それは洪水により村落の水没、水田や住居に多大な損害をだしたのに対して、神につぐなう意味が含まれているのかも知れない。

紡錘車 9 △ G出土、灰緑色、所により緑色の蛇紋岩?、形は台錐状を呈し、直径44mm、厚さ13mmで、中央の小孔は直径7.5mmである。紡錘車は単独に出土し、機械具などの部分品は伴なわなかつた。このような完成品を残しているのは注目される。(第48図35) (図版13-1)

(文中のレベルは水系の3.345mを基準にした。)

石製円盤 8 G出土、長さ26mm、幅21mm、厚さ5mm。(第48図39)

漁網用おもり (第48図1-27, 32) (図版13の1) (図版13の1の左側)

漁網用おもり №.1

3月21日、10イG、第3黒色土層中、直径21mm、厚さ16mm、孔径6~5mm。(第48図1)

漁網用おもり №.2

12月27日、9△G出土、第1黒色土層中、直径23mm、厚さ16mm、孔径7.5mm、つなぎ目がわかり、つなぎ目の上端部が欠損している。黄灰色、細砂を含む。(第48図2)

漁網用おもり №.3

12月29日、9△G出土、褐色粘土層中。直径20mm、厚さ15mm、孔径5mm、中粒や荒い砂粒を多量に含み、ザラザラで褐色を呈す。(第48図3)

漁網用おもり №.4

3月21日、10イG出土、第3黒土層中。直径22mm、厚さ13mm、孔径3~4mm、黒色で中粒や細かい粒の砂を多量に含む、ざらざらしている。(第48図4)

漁網用おもり №.5

12月31日、9△G出土、-53cmの所で出土。直径30mm、厚さ24mm、孔径4mm、焼成良好、つなぎ目あり、黄灰色を呈す。部分的に黒灰色のところあり。小粒、中粒の砂を含む。わずかにひびわれがある。(第48図5)

漁網用おもり №.6

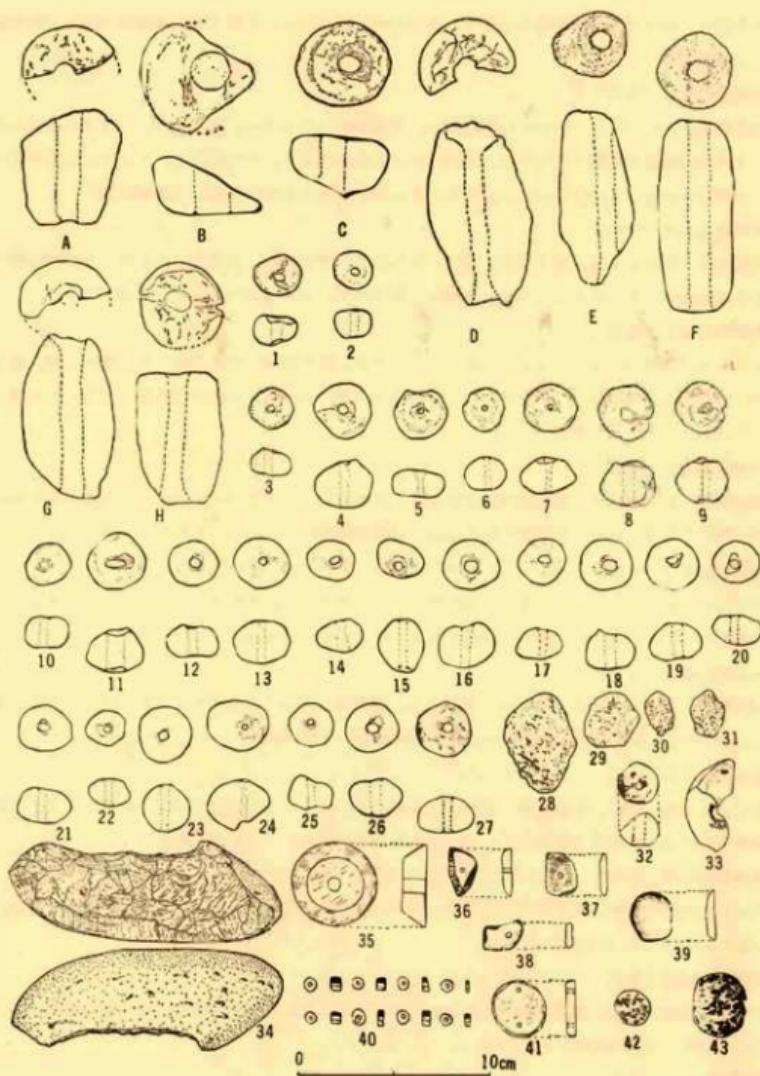
12月30日、9イG出土、第2黒色土層中。直径27mm、厚さ12mm、孔径3mm。焼成良好、孔は表面近くで広がる。下では5mm、上では8mmに広がっている。黄灰色であり、つなぎ目の所にへこみあり、細砂を含む。(第48図6)

漁網用おもり №.7

12月28日、6イG出土、褐色粘土層中。直径22mm、厚さ17mm、孔径2~2.5mm。焼成良好、灰色、中粒や細砂を含む、孔は真すぐである。(第48図7)

漁網用おもり №.8

12月31日、8イG №.1、-46.5cmの所に出土。直径28mm、厚さ19mm、孔径3mm、孔は口の所で広がる。下は4mm、上では6mmに広がっている。細砂を含み、黄灰色で黒色の斑点がある。均整のと



第 48 図 土錐、漁網用おもり、祭具及び石器

れた漁網用おもりである。(第48図8)

漁網用おもり №9

12月27日、9口G出土、褐色粘土層中。直径29mm、厚さ21mm、孔径6mm。つなぎ目あり、孔は直口。(第48図9)

漁網用おもり №10

12月31日、8イG №3、—48cmの所に出土。直径26mm、厚さ21mm、孔径3mm、つなぎ目の跡がある。灰黒色、細砂と荒粒の砂を含む。右側に溝状になっており、つなぎ目といふより、この溝状の所に魚網をかけたのではないかと思われる。溝の深さは3~5mmである。(第48図10)

漁網用おもり №11

12月30日、9イG №2、第1黒色土層中。直径24mm、厚さ16mm、孔径4.5~4mm。中粒や大粒の砂を多量に含み、ざらざらしており、黄橙色。均整のとれたおもりである。(第48図11)

漁網用おもり №12

2月5日、9口G、おもり№2、—60cmの所に出土。直径31mm、厚さ27mm、孔径8~9mm。焼成良好、梢円をした孔を持ち、灰黒色、黒色の部分もある。細砂や中粒の砂を多量に含み、つなぎ目はわずかにわかる。(第48図12)

漁網用おもり №13

12月30日、8口G №1、直径26mm、厚さ15mm、孔径5mm、ややななめにあいている。小粒の砂粒や荒い砂粒を多量に含み、ざらざらしている。(第48図13)

漁網用おもり №14

12月29日、6イG、第2黒土層中。直径26~27mm、厚さ22mm、孔径3~4mmやや斜めにあいている。細砂や中粒の砂を含む灰黒色、灰黄色に近い所もある。(第48図14)

漁網用おもり №15

12月31日、9口G、№5。—53cmの所に出土。直径21~24mm、厚さ17mm、孔径5mm。黒褐色、ところにより黒色。細砂や中粒、荒粒の砂を多量に含む。(第48図15)

漁網用おもり №16

不明、直径20~23mm、厚さ26mm、孔径4~5mm、孔は中央よりに偏在している。黄灰色で多量の中粒や荒粒の砂を含みざらざらしている。分厚なおもりである。(第48図16)

漁網用おもり №17

不明、直径26~30mm、厚さ22mm、孔径5~6mm。黄灰色で多量の細砂や中粒、荒粒の砂を含む。ざらざらしている。(第48図17)

漁網用おもり №18

不明、直径24~25mm、厚さ16mm、孔径4mm、黄橙色で多量の細砂や中粒の砂を多量に含み、ざらざらしている。(第48図18)

漁網用おもり №19

不明、直径25~27mm、厚さ19mm、孔径5~6mm、黒灰色を呈し、黒色のところもある。細砂や中粒の砂を含む。(第48図19)

漁網用おもり №20

不明、直径26~27mm、厚さ1~9mm、孔径5mm。黒色と灰黒色を呈す、細砂や中粒の砂を含む。
(第48図20)

漁網用おもり №21

12月30日、9イG、№3、直径21~25mm、厚さ15mm、孔は直口で大きい、中央になくやや偏在している。褐色を呈し、細砂や中粒、荒い砂を多量に含み、ざらざらしている。(第48図21)

漁網用おもり №22

不明、直径23~28mm、厚さ19mm、孔径4mm、褐色を呈し、中粒や荒い砂粒を多量に含む。ざらざらしている。(第48図22)

漁網用おもり №23

不明、直径13~20mm、厚さ14mm、孔はふたまたに分れ、3~4mmが中央、わきえだが2mm。灰色を呈し、細砂、中粒の砂を含む。(第48図23)

漁網用おもり №24

2月5日、9ロGおもり№1、-51.5cmの所に出土。直径27~29mm、厚さ23mm、孔径3~4mm、やや斜めにあく。橙灰色、やや黒ずんだ灰色の所あり。わずかに中粒の砂を含む。焼成良好。(第48図24)

漁網用おもり №25

12月30日、9ロG、第2黒色土層中。直径22~25mm、厚さ25mm、孔径2mm、中央よりやや偏在している。黄褐色であり、中粒の砂を含む。土玉の下部の一部が欠損している。(第48図25)

漁網用おもり №26

12月31日、8イG、№4、-50cmの所で出土。直径22mm、厚さ16mm。灰黄色で細砂や中粒の砂をやや多く含む。(第48図26)

漁網用おもり №27

12月31日、8イG、№2、-49cmの所で出土。直径25~28mm、厚さ19mm、孔は垂直であり、孔径5~6mm、焼成良好、灰黄色から黒灰色のまだらであり、細砂を含み、つなぎあわせ目がわずかにわかる。(第48図27)

土錘(第48図参照)(図版13の1右側)

土錘 A

不明、推定直径、胴部で51mm、残長59mm、孔10mm、灰褐色で部分的に黒く焼けているところあり。中まで焼けているので焼成時のものと思われる。荒粒と細砂を含む。(第48図A)

土錘 B

残長29mm、孔19mm。灰褐色で細砂や中粒の砂を割合含んでいる。(第48図B)

土錘 C

3月21日、10イG、第4黒色土層上。直径43~48mm、厚さ30mm、孔11mm。孔の付近は灰黒色、他は灰色、荒い砂粒や中粒の砂を多量に含む。この種のものは1個しか見田方では出土していない。

(第48図C)

土錘 D

12月30日、10ヘG出土、半割の土錘。推定長110mm、直径50mm、孔径11mm。灰色に褐色がかり、荒粒の砂と細砂を多量に含む。(第48図D)

土錘 E

第一次調査、全長90mm、直径34~37mm、孔入口で9~11mm、孔では9mm。(第48図E)

土錘 F

発掘前採集、完形品、長さ100mm、直径39~40mm。孔径11~12mm。灰褐色、部分的に黒ずんでいる所あり、小粒や中粒の砂を含む。表面に擦痕が残っている。(第48図F)

土錘 G

9 □ G、半割、全長85mm、直径47mm、孔10~12mm、焼成良好。(第48図G)

土錘 H

12月31日、9 □ G、—54cmの所で出土。残長68mm、直径45mm、孔径10mm。入口近くでラッパ状に開く、18mm。橙灰色を呈し荒粒の砂を含む。(第48図H)

軽石 (第48図28~31)

軽石 A

12月31日、9イG、—60cmの所で出土36×52mm、加工の痕跡なし。(第48図28)

軽石 B

1月7日、9□G、炉内出土、27×28mm、各面がややすくへっている軽石、加工痕跡なし。(第48図29)

石器 一名称不明一

細長い穂を半分に割り剥がし、弓形に内部にうちかきを加えて刃部を形成している。手に持つと石包丁用の用途に使うことができる。全く用途不明であるが、儀式の時に古い形態の農具が使われ、この様な原始的な農具を儀式の中で用い、きっと禮み具として使用されたものではないかと思う。(第48図34)

漁具おもり、土錘が多数出土し、孔径よりみると土玉の網は3mm以下と5mm以上の2種類の網があった様で、おもり自身には区別はない。このようにおもりをつける漁網に2種類存在したらしい。しかし現在となってはその全貌を復元することはできない。この様な漁網は小形の網で、付近に沼地や河川が存在していて、河魚を獲っていたのであろう。一方土錘の網は孔径より見ると1cm以下の太い漁網を使い、当然大形漁網で何人かでひっぱるものであろう。この漁網は部落の集団でひっぱった網で、大きな河川や大きな沼で使かれたものであろう。前者は小川や沼で使う個人用の網であると思う。

おもりに含まれている細砂や中粒の砂、荒粒の砂などの割合、焼成より見ると各おもりは多くは別々に作られており、時期を異にして作られたおもりが多数あるように見える。このことは網がいくつもあり、おもりが操業中に欠損したとき1個1個補充していたことを示しており、この遺跡で

おもりを作っていたことを示すようである。またこのいくつかの網もいっぺんにそろえたのではなく、一つ一つそろえていたものと思われる。これがおもりの各種の砂粒の混合の度合を異にする原因（おもりの作られた時期が違う）となっているものと思う。土錘もおののおの砂の混合具合が異なり、時期を異にして作られた土錘を使用している。これは採集中の欠損などにより補充していたからであろう。土錘の1個を除き、すべて破損していることは採集中の欠損がいかに大きかったかを示している。（中村嘉男）

文献A 人類学民族学博物館論文集25巻「ソ連以外のアジアとオセアニアの諸民族の文化」カ・ヴェ・ビヤトキナ「ダルハート族のシャーマンの衣服」

文献B エス・ヴェ・イワノフ「北シベリア諸民族の彫刻」

4 木製品

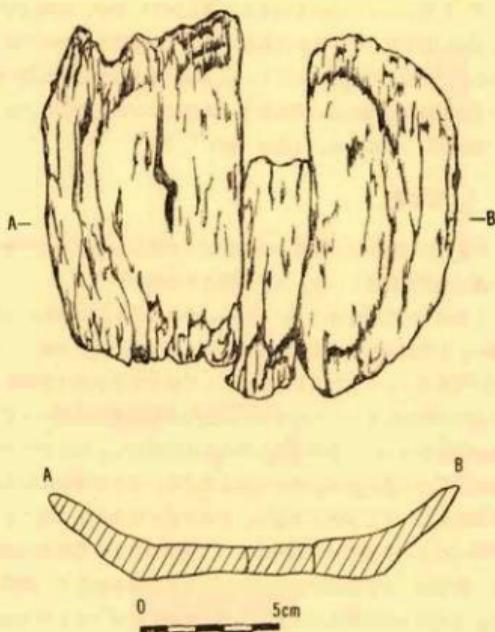
低湿地に存在する本遺跡の発掘に際しては、調査前から木製品の検出に大きな期待を抱いていたのであるが、結果は残念にもはずれてしまった。そして、明確に木製品と認めることができたのは次に述べる2点のみで、他には1号住居址および2号遺構、西側溝の周辺で出土した木材が見られるのみであった。

木製品No.1(第49図)(図版13の3)

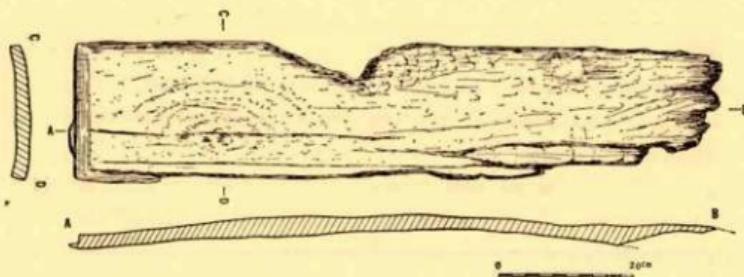
これは9号Gの灰青色粘土層中より出土したもので、当初より3片に分かれており、中央部の半分は発見できなかった。大きさは $15 \times 14\text{cm}$ 、中央部の厚さは1.2cmである。全体が非常に磨滅しているため原形は正確にはわからない。しかし、縁辺部のカーブの具合から円形に近いものと推定できる。盆よりもむしろ浅い鉢といってよいだろう。内底は平坦であるが、外底は中心に向かってへこんでいるので、中心部が周辺に比べてうすくなっている。内周の径はほぼ10cmである。

木製品 No.2 (第50図)

これは2号住居址の床面直上、南側壁に接した位置より出土したもので、第2次調査の端



第49図 木 製 品 No.1



第 50 図 木 製 品 № 2

緒となつた。長さ90cm、巾20cm、厚さ3cm前後の板である。中央部上方の 20×5 cmの三角形の部分は、焼けたために欠けており、さらにここから右側の表面は一面にこげており、右端はちぎられたようになっている。一端は鋭い刃物で途中まで切断されており、残りをへし折る際に一部が残ってしまったらしい。表側は平らでよく削られているが、裏側は表にくらべると凹凸がある。また断面を見ると若干反っているがこれはこのように整形されたのではない、発掘後にPEG液に浸した關係もあって反ってしまったらしい。なお、周辺部で左端以外に整形された跡はないが、長さはともかく巾はほぼ原形に近いであろう。裏側にはこげた跡は見えないので、この板は二次的に焼けた可能性が強いと思われる。（坂本 彰）

5 流木群

配水溝の西側に田の土を一部はぎとった跡がある。ここで横になった流木状の木と直立した小木が続く地帯が認められた。（第9図点々の地点）

小木はすでに根を持っていないが、小さな立木列なのか、小木抗列なのかというと前者の疑いが強い。小木抗列にしては木の幅が抗によるよりずっと小さく、抗の役割をしないし、小地帯として認められるという点である。横になって出土する小木は垂直に立っている小木が折れて散在しているものと思われる。したがって、小木の方向に意味はないと思う。またこの小木群は一定の地帯に帶状にあるだけで、その延長上には小木列ではなく、それより考えると一部だけなんらかの原因で残存したものと思われる。考えられることは、小さな垣根になるような小木列が一部残存したということである。もし垣根とすると、この付近に住宅があったことになる。しかし幕末以来ここに住居があったという記録はもちろんない。現在のような環境では住居は存在しない。ありうるとすれば、湧水面が非常に低い時代である。気候が寒冷になると海退するので沖積地の湧水面は低下する。その代り寒冷期は雨が多い。16~18世紀にヨーロッパでは little ice age にあたり、氷河が増大し、後氷期以後の最大の寒期となっている。これは全世界的な傾向で、日本では江戸時代にあたり、当時の錦絵などに雪の繪が多く、寒冷で長雨の時代であった。この寒期の頂点である18世紀

初頭には長雨のために虫害が発生、またひんぱんに大飢餓が起り、洪水が起きている。この時期は沖積地は海退による湧水面の低下により、ひどい低地にも住宅の建設が可能となってくる。恐らくこの時代の住居の生垣であろう。すでに伝承はたえてしまっている。6世紀にもやや寒冷期があり、7～8世紀には大きな温暖期がある。温暖期になると海進が起るので沖積地の湧水面が上り、低地では住みにくくなり、集落地を台地上にもうけ、気候は乾燥するので堅穴住居（寒冷期の長雨に弱い）を好んで使用するようになる。鬼高郡に発掘現場で立木列は発見されていないので、この時期のものとは思われない。立木列の外側に断面U字状の大きな溝が走っている。U字溝を一部発掘したが、なんら土器片も出土せず、また住居址やその周辺で出土した黒色有機質の土層も伴わず、この遺跡の時代とは思えない。しかし現代のものでなく溝は1CGから2CD、3D、4D、5DE、6EGを通ってカーブしてゆく。（第9図の帶）このようなカーブの仕方も最近行った耕地整理以前のカーブの仕方である。（中村嘉男）

6 樹種

見田方遺跡の特徴の1つは各種用材の出土であろう。これら用材は、長い間の高湿度、覆土による酸素の補給及び光の遮断によって好気性細菌類の繁殖ができずに、今まで地下に残ることができたわけである。しかし、ひとたび外気に触れるとその老化は驚くべき早さで進行する。したがって発掘後PEG液による保存方法がとられたとはいえ、プレバラート作製までにはかなりの日数を経過しているため、顕微鏡写真による樹種の判定には困難があった。以下いくつかの標本比較による樹種をあげると

1 住居址床面の木片及び機械棒（図版14の1・2）

樹種 ヤナギ科ヤナギ属あるいはドロノキ属

2 第1住居址の用材（図版14の3、15の1・2）

樹種 ヒノキ科ヒノキ属ヒノキあるいはサワラ

3 第2住居址の木片（図版15の3）

樹種 ブナ科コナラあるいはカシワ

この調査には、越谷高校中沢教諭、国立博物館山内技官の手をわざわざしたことを付記します。

（有瀧竜男）

7 「一本杉の塚」

57Gの先に、昔、一本杉が生えていた円墳状の塚があり、発掘のさいこれを全掘した。内部の土は田の土と同じ黄褐色粘土層であり、内部より江戸末期の陶器碗2個の破片が出土した。この塚は古いものではなく、江戸時代に、しだいに田の隅に土が盛られていったものと思われる。あたり一面水田の中で、ちょっと高くなったりした塚の上に一本杉が生え、のどかな田園風景をいろどっていたものと思われる。（中村嘉男）

ま と め

関東平野の広大な沖積低地の中央部にある越谷市の付近でわれわれの祖先の営みを伝えるものとしては、大相模字東方の水田で砂岩製の古墳石鄰に併い埴輪円筒と須恵器が発見されたこと、八条および楠木に円墳があり、付近には小字名で四条、後者では八条という条里制の地割に関係ある地名を残していることが報告されている。これらの古墳は、現在も集落が占地している古利根川の自然堤防に沿って造られ、その後背湿地に条里制の水田が造成されたことを想定させるものであった。⁽¹⁾ このことは、今の東京湾に近いさらに下流の東京都の下町で、より古い弥生時代や縄文時代の遺跡が発見されている事実と対称的である。もしそうすれば、上流から次第に陞化が進んで順次人が住むようになったとする常識とはまさに逆である。⁽²⁾

またその推定された条里田の所在は、何れも大相模字四条の地で新田・千疋・別府・南百・見田方の大字にまたがった地域であるというので、そうとすれば古利根川と元荒川が作った自然堤防で一応洪水が防がれるような後背湿地の一角が利用されたように見えるのである。⁽³⁾

ところで現在もなお水田地帯であり、自然堤防からは大分離れた見田方の数地点から古墳時代後期の土器だけでなく住居址らしいものの発見が伝えられたのである。これは一方では条里制の施行の可能性を暗示するようであるが、それが確かならばこの低地に条里田のみでなく集落が営まれ得た諸条件を明らかにすることが新しい課題として投げかけられたことになる。このような問題を抱えて今回の発掘は行われたのである。

調査の結果は後に述べられるように、確認された住居址の基盤をなす土層は何れも灰色粘土層で三角洲の堆積物とみなすべきものであった。おそらく縄文前期には今の利根川の南辺まで達していた奥東京湾が海退期にはいって、この付近に河口があった頃の堆積物であろう。さらに海退が続いてこの三角洲が陸化すると共に、今の集落が乗っている自然堤防はその上に形成されたのである。⁽⁴⁾ 現在土器の発見される水田が周辺の湿田と比べて乾き易いと云われ、さらに竪穴住居址が発見されることは、この陞化した三角洲の微高地に當時集落が営まれ、水田はさらにも低い周辺の湿地に造られたことが想定される。海拔3mそこそぞ掘ればすぐ水の溜まる現在の状況では竪穴住居はできそうもない。おそらく、より乾燥した状態が前提条件となるであろう。この推測に見合う一つのデータとして、弥生時代の海面が現在よりもむしろ低かったという、かってわれわれが明らかにした事実がある。⁽⁵⁾ これはこの時期を中心とする気候の若干の寒冷化と関係あることも明らかにされてきたが、この見田方遺跡の例はその後の温暖化に伴う海面の上昇がまだ余り進まぬ一過程を示す事実⁽⁶⁾と考えられる。今後沖積低地におけるこの種の遺跡の調査を積み重ねることによって、この過程はより詳細に辿られるであろうが、その第一着手であるところに今回の調査の一つの意味があった。

次に今回の発掘で現われた限りでの事実を中心とする集落の実態であるが、出土する土器と須恵器の示す特徴から6世紀後半を中心とする時期が想定され、同じ時期に洪積台地に営まれた竪穴住居が隅丸の方形で、一方の壁にかまどを掘り込み、寄棟の屋根を支える柱の位置も整然としているのに対して、第1、第2住居址ともに不整であり、かまどにかける形態として発達した長甕も見

出されるのに炉で間に合せている点が注意をひく。またこれらは浅くとも堅穴であることに間違いないが、地山の灰色粘土が掘り込まれず、その上面を堅穴住居と同じく有機物を含む第2黑色粘土層が覆い、その中に炭化した用材や壁体のカヤや藁が検出され、土器などの遺物が散乱し、平地住居と疑われるものも存在した。しかしそのうちの第1号遺構では間層を挟んで区別されるレベルの高い第1黑色粘土層からの落ち込みが認められているので、この土層の堆積が行われて後に掘られた堅穴であると考えられぬこともない。何れにせよこの種の黒色粘土層は洪水による埋没が度々起ったことを示し、第1・第2黑色粘土層に含まれる土器型式に大差ないことによても知られるのである。

このような洪水の危険のある土地に住み、彼等はどんな生活を送ったのであろうか。先に触れたように周辺の湿地で水田を作ったことは想像するに難くない。今回の調査範囲でも西に向ってゆるやかに下る湿地帯など、この調査以後に開発されたイネの花粉分析による当時の水田面の有無を検討する必要を認めている。

さらにこの湿地はより深い沼や川に続いているのであろう。遺物としては数多く発見される効鍾形や丸形の土錘が、この水域で小規模な網漁が行なわれたことを推定させる。万葉集に「埼玉の津々^{ツツ}いる船の風をいたみ朝はためども言は絶えそね」とあるのは、このような川や沼を縫って船の往来も可能であったことを意味するのではないかろうか。

当時おそらく今の古利根や元荒川の本流に堆積した自然堤防は存在していたに違いない。それは前述した古墳の存在や15キロほど下流の同じ自然堤防上に埴輪を出す古墳がすでに造られていることでもわかる。したがって現在の集落が乗っているより危険の少ないこの自然堤防上に人が住みつく可能性は大きい。¹⁰現に相似した条件にある奈良時代の越前国道守莊では、当時の田図の記載だけではなく、われわれはそれを発掘によって確認したのである。¹¹しかしここではその検討は今後の課題である。何れにせよこの大規模な自然堤防が形成され、川の主流が他に転じている間は、背後の集落を守る文字通りの「自然堤防」であったに違いない。しかし不時の災害を防ぎこの低地の集落や周辺の水田を經營するためには、人工の堤防や灌漑・排水の満などの施設の造成が絶対に必要であろう。その技術的なまた体制的な条件が、弥生時代から古墳時代前期にかけて飛躍的に発展した経緯をここで繰り返さぬとしても、古墳時代後期のこの時点では、安閑紀にある武藏国造家の内紛（AD 531）の結果、大和勢力と結んだ北武藏の勢力が南武藏を圧して、行田市の埼玉古墳群に象徴されるような権力が確立していたのである。¹²

荒川の扇状地の末端に営まれた広い条里制の開墾は、この地方政権によって着手されたであろうし、このような政治権力による新しい耕地を求めての部民の移植も盛んに行なわれた時代である。北武藏の勢力圏に属するこの地域で、上述のような自然的条件を利用し、少なくとも利用せんとしてこの集落を造りえたのは、決して個々の住居址に住む個々の家族が意的になしうことではなく、集団的な労働力として地方権力によって組織されたものであろう。しかもなお自然の猛威は、この古代的な技術と労働組織による工事の達成を乗り越えてしばしば洪水の害を及ぼしたことは前述の通りである。ここで発見される祭祀の具としての石製模造品は、荒ぶる神の魂を鎮め、豊作を天に祀る古代農民のはかない願望を象徴するものであろう。洪水によって荒廃しきらくその後も

引き続いた小海進によって地下水面上も上昇した後背湿地の堆積面が再び開墾され、現在の美田に直接の系統をひく水田が造成されるのは、さらに数百年後の近世的な農業生産力の発展期を迎えてからである。自然堤防上の現在の集落に現存する板碑などに刻まれた年号が、その拠点となった集落の伝統の古さを示している。先に述べた福井平野の道守莊でも同じ動向が認められたことからも、この事実はこの地域における単なる偶発的なものとは思えぬのである。（和島誠一）

注

- 1 「埼玉県史」 P.332 1951年
- 2 同上
- 3 「千代田区史」 P.133 1960年
- 4 三友国五郎「関東地方の条里」 P. 3 埼玉大学紀要第8巻社会科学編（歴史学、地理学）1959年
- 5 高崎力 埼玉地域研究会研究集録「大相模地区的古墳遺跡」1966年
- 6 和島誠一・松井健・長谷川康雄・岡本勇・塚田光・田中義昭・中村嘉男・小宮恒雄・黒部隆・高橋建一・佐藤政「関東平野における縄文海進の最高水準について」P. 109~113、資源科学研究所報第70号 1968年
- 7 和島誠一・麻生優・田中義昭「北九州における後氷期の海進海退について」
資源科学研究所報第63号 1964年
- 8 藤 則雄「日本海沿岸砂丘」金沢大学日本海域研究所報告1969年
- 9 和島誠一「東京市内志村における原始時代堅穴の調査予報」考古学雑誌28巻9号
- 10 注(3)参照
- 11 大西青二「東大寺領道守庄遺跡調査概報」日本歴史第244号1968年9月号
- 12 横浜市史1巻 P.127

図 版

図版 1

第1次、第2次発掘状況



図版2

1号住居址



図版 3

土器出土状況



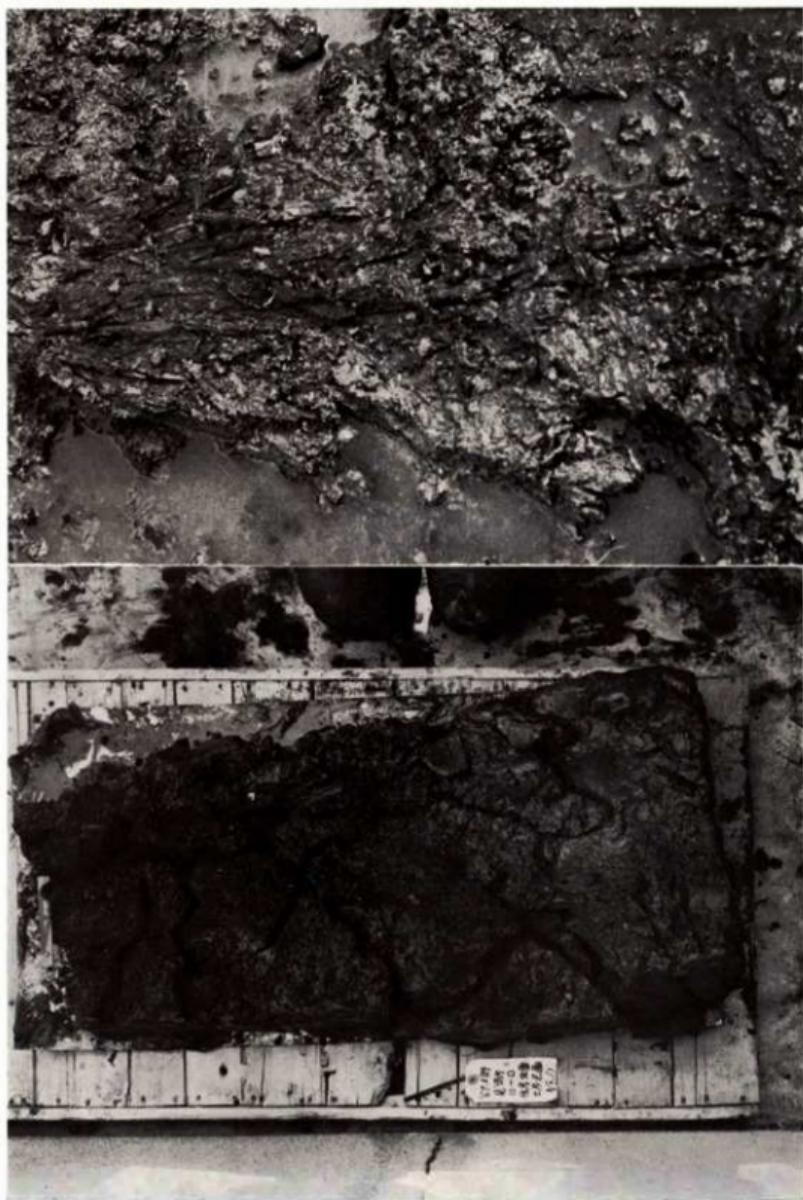
図版 4

2号住居址



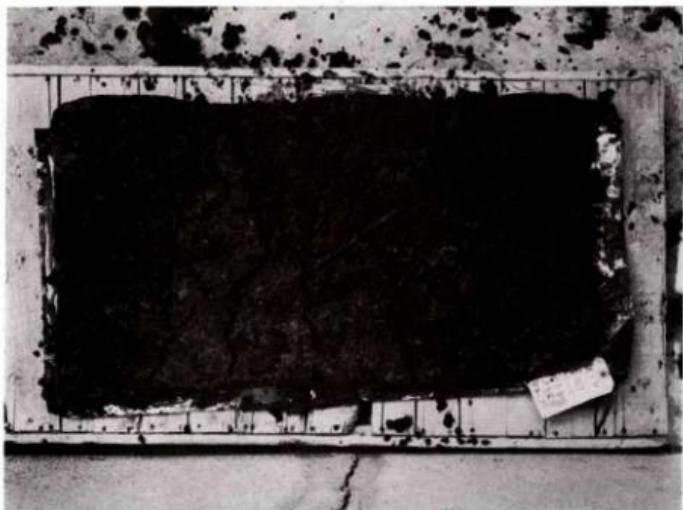
図版 5

2号住居址



図版 6

2号住居址



図版 7

2号住居址、3号遺構



図版 8

4号 遺構



図版 9

5号遺構



図版 10

土 器



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

0 10cm

?

図版 11

土 器



1



2



3



4

0 10 cm



5



6

0 20 cm



7



8

0 15 cm

版図12

土器、須恵器



1



2



3

0 15cm



4

0 5cm



5

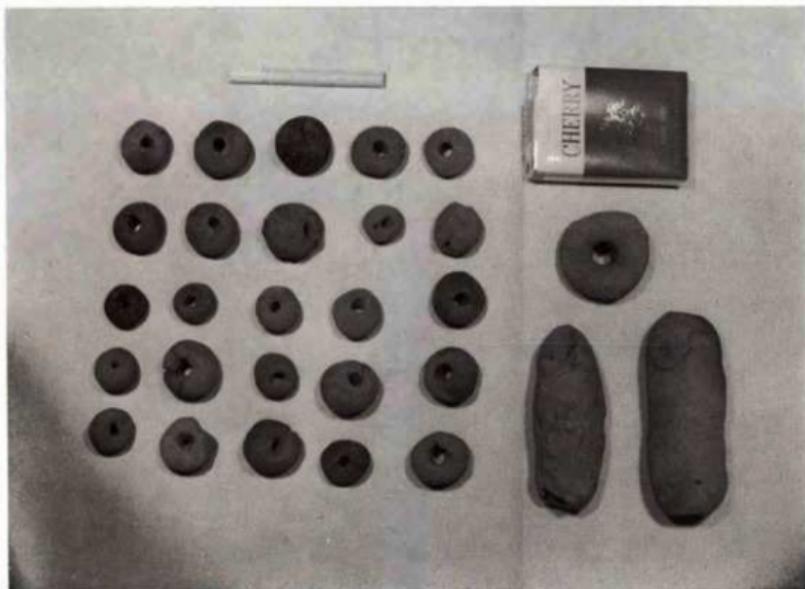


6

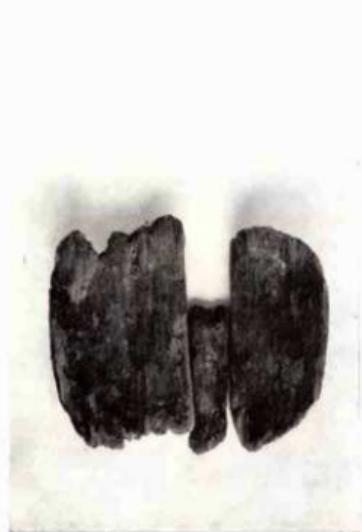
0 20cm

図版 13

漁具、祭具、纺錘車、木器



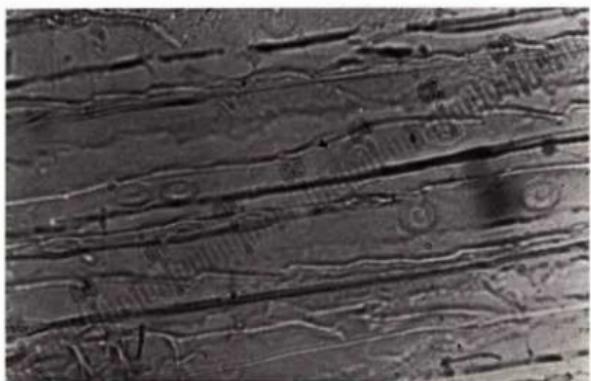
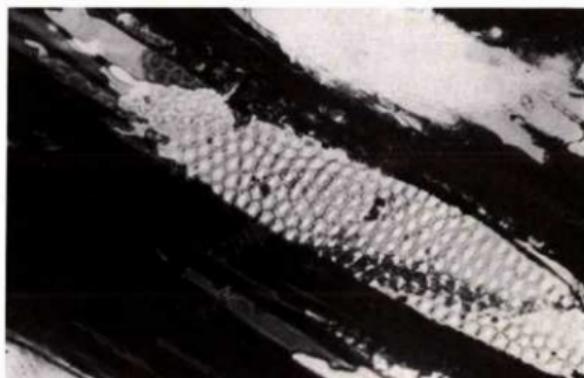
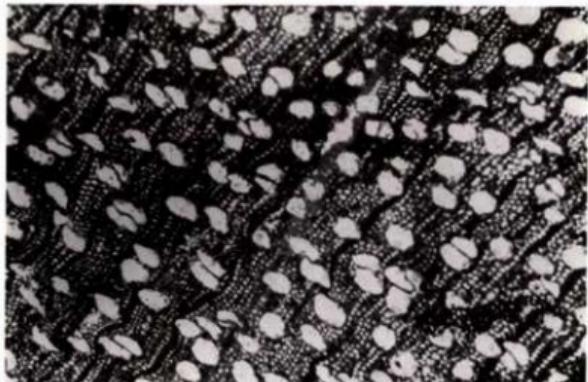
13の 1



13の 2

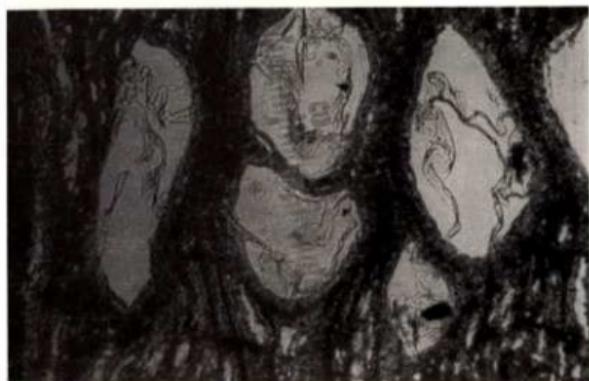
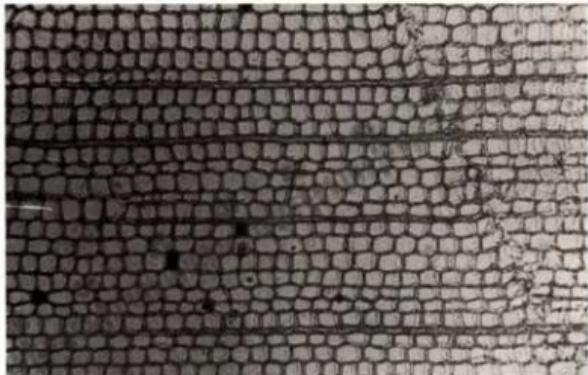
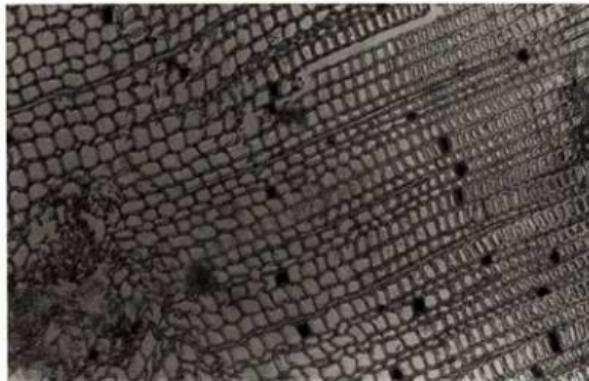
図版 14

樹種類微鏡写真



図版 15

樹種顕微鏡写真



見田方遺跡発掘調査報告書

昭和46年3月発行

発行 越谷市教育委員会

印刷 株式会社 誠美堂印刷所
与野市下落合512

